

異  
本  
義  
經  
記

## 凡 例

一、本書は叡山文庫藏、異本義經記を底本として、略注を施し、章段を設けて、義經傳説の研究に資せんとするものである。

一、底本の片假名を平假名に改め、且つ假名遣の不備を補ひ、松井文庫舊藏本を以て誤脱を正し、又漢字の誤りを訂正して、研究者の便に供し、本文に句讀點、濁點を付して讀解に便ならしめた。

一、本文中の注と認むべきものは二字さげて組み、本文との別を明確にしたが、注の成立時は不明である。

一、本書の出版については、叡山文庫の御配慮を深く感謝する次第である。

昭和四十五年九月十一日

異本義經記目次

卷 上

義朝子女	一七九
義經生立・鞍馬入	一八〇
聖門坊	一八一
遮那王貴船詣	一八一
橘次季春・深栖陸助重賴	一八二
遮那王海道下	一八二
遮那王奥州下着	一八七
鬼一法眼・義經上洛	一八七
湛海被斬	一九〇
増尾十郎權頭兼房	一九四
武藏坊辨慶	一九四
常陸房海尊	一九五
鈴木重善	一九六

鷲尾三郎・源八廣綱・江田源三・熊井太郎・駿河次郎	一九八
備前平四郎	二〇〇
鎌田兵衛娘牛王	二〇〇
關原與一・牛王最後	二〇三
義經奥州下向	二〇四
義經平家追討	二〇五
義經大嘗會前驅	二〇七
屋嶋合戰	二〇八
壇浦合戰・義經景時不和	二一〇

# 卷 下

義經鎌倉下向	二一四
土佐房被斬	二一六
義經都落	二一九
靜鎌倉下向	二二三
梶原景茂靜無禮	二二五
義經多武峯入	二二六

禪林房覺日札問	二二七
常盤札問	二二九
守覺法親王述懷	二三〇
義經小舍人童五郎丸	二三四
堀彌太郎景光生捕	二三五
佐藤忠信討死	二三五
南都勸修坊得業聖弘	二三六
山口太郎家任	二三七
景時家人河津小五郎	二三九
鈴木重家	二四〇
義經討死	二四二
義經室家仕女物語	二四二
義經奥州下向	二四三
賴朝奥州征伐	二四四
秀衡死去	二四七
忠衡討死	二四八
義經首葬	二五〇



異本義經記卷上

(義朝子女)

左馬頭義朝の息男以上十人の内、八田筑前守は出生の時、<sup>(二)</sup>宇都宮左衛門尉知綱が子にして、

義朝の子の内へは入れず、姓も藤原と改む。義朝の嫡子、惡源太義平平治二年誅、二男中宮大

夫進朝長<sup>(三)</sup>美濃國青墓、三男右兵衛佐頼朝、四男四郎御曹司義門早世、五男土佐御曹司希義治承

六年於土佐國誅、六男浦御曹司範頼<sup>(四)</sup>建久四年伊豆國修善寺に流、七男帥公全成建仁二年隱謀常陸國流

建仁二年隱謀  
常陸國流誅

誅、八男卿公義圓養和元年美濃國墨保川にて討死、九男義經、九郎御曹司と號す。女子三人、本妻

熱田大宮司秀範の娘の腹の息女、後藤兵衛實基養君にして育て、左馬頭良保朝臣の妻室是也。

鎌田兵衛方にて育て給ふ息女、平治の亂の時、義朝の命に依て、政家指殺したるぞ。美濃國青

墓の長者大炊が娘延壽女が腹の息女は、同亂の時自ら杭瀬川へ入水有りしぞ。<sup>(七)</sup>

<sup>(八)</sup>小田系圖に云、義朝子、八田四郎武者所筑前守左衛門尉知家、平治没落之後、宇都宮左衛

門知綱<sup>(八)</sup>八田權守宗綱子、養育之爲子。頼朝執權之時、多誅源氏族之間、恐其權威、子孫稱藤原。康

治元年二月十三日卒、七十五歳。法名尊念、號極樂寺云。或云、爲八田權守宗綱子、故號

八田四郎藤原知家。七代の後常陸介正三位左中將治久代、尊氏上洛之時、同時昇殿、改藤

原源氏と有。

## (義經生立・鞍馬入)

大夫判官伊豫守從五位下義經、母九條院官婢、常盤、平治元己卯年、洛北紫竹にて生まる。

父義朝討たれし時、常盤子共を隠さんがため、今若丸八歳、乙若丸六歳、手を曳き、牛若丸二歳

なるを抱き、平治二年二月九日の夜、清水寺の觀音へ詣うで、義朝の菩提、子共の行末を祈

り、其れより直に大和國宇陀郡へ志して落ち行く。龍門と云ふ所に常盤が母方の叔父の有りけ

れば、其れを頼みて隠れ居たりけるに、京にて常盤が母を囚へて、常盤並びに子共の行衛を責

め問ふの由告げ來たりし故、常盤も遣る瀬なく、子共三人引具して京へ出でたり。常盤は今

年二十五、都に名を得たる美女なりしゆゑ、清盛思ひ初めて、子共をも赦したりとにや。今若

は醍醐に登せて出家させ、師公全成、後阿野禪師と云うたぞ。乙若は卿公義圓とて、八條宮の

坊官法師にてぞ有りける。

九條院藤原呈子、關白忠通公女、實太政大臣伊通公女、近衛院后。八條宮、後白河院皇

子、(三井)圓滿院圓惠法親王。

常盤清盛に馴れて息女を産みて後、一條大藏卿長成朝臣の妻室になりて、爰にても子共出で

來たり。牛若は暫く繼父長成朝臣の方にて育立つ。七つの歲鞍馬寺の阿闍梨東光坊圓忍の弟子

になり、翌年二月鞍馬寺に入る。十四歳にて圓忍の弟子、禪林房阿闍梨覺日が附弟になりて、改

名、遮那王丸と云うたぞ。清盛兼ねて常盤が子供法師になせと宣ひたるにより、兄二人も法師



になしてけり。牛若も十三の年得度させ給へと、母の常盤も繼父長成朝臣も宣ひければ、圓忍(二三)も良智房の快圓も、然るべき事の由宣ひしに、禪林房覺日兔角延ばして、十六歳まで得度なかりし事、禪林房色に愛着せし故也とぞ。常盤容貌美麗なるを、義朝愛し妾として、三人の男子を産み、遮那王母に似て其の艶濃つやこもやかなりと云云。

(聖門坊)

其の頃(一三)四條坊門に聖門房と云へる者有り。鎌田政家が妾の腹の嫡子にて、月輪院にして出家に成り山門記には月輪寺と有り、諸國を遊行して京へ歸り、四條坊門に住みけり。治承年中還俗(一四)し、鎌田藤太盛政と云ひ、弟を藤次光政と云ひて、讃岐國にて兄弟共に討死す。末は女子にて牛王女と云ひたるぞ。聖門房折々遮那王殿へ参りて、物語の序ついでには、御家を興し給へと勧めしと云云。

(遮那王貴船詣)

遮那王、早足飛越なんどし給ふに、外の人よりも身軽く有りしぞ。十四歳の秋の頃より、惡僧など聚あつめ、木太刀にて打合ひ給ふに、手利てきりにて四五人を只一人して打勝ち給ふとにや。常に毗沙門堂へ参り給ひて、直すぐに貴布禰きふねへ詣うで給ふ事有り。何なんの頃よりか夜毎ひたに潜ひたと貴船へ参り給へり。或夜禪林房と同門葉、和泉律師と示し合せ、跡に付きて行きたるに、遮那王、先づ本

堂へ参り、其れより貴船へ詣うで給ふ。折節空搔暗り、最闇きに、人十人計りの聲して、山の上かと思へば、谿の底にあり。又管絃の音聞ゆ。禪林房も和泉も魂を冷し、叢を漸々匍匐て寺に歸りしと云へり。遮那王、僧正が谿にて大天狗に兵法を習ひ給ふと寺中沙汰しあへり。或時覺日密に遮那王殿に此の事を尋ねしに、聊かも宣ふ事もなく、只貴船へ夜毎に詣すと計り答へられしとかや。

(橘次季春・深栖陸助重頼)

(一六)

三條の橘次季春と云ふ金商人有り。後の堀彌太郎景光は此の季春と云へり。毎年奥州へ下る。秀衡が方へも出入すと也。遮那王、橘次が参詣毎に昵み給ふ。又下總國の住人深栖陸助

(一七)

重頼と云へる者、其の頃大番にて在京したり。鞍馬を信じて、毎度参籠する。遮那王、是にも昵みたるぞ。去年橘次奥へも下る時、秀衡が方へ、京にも住み憂ければ頼み下らばやと宣ひ遣はされければ、秀衡、當時朝敵の公達なれば、尊敬する事、上へ其の惶れも有りなん。兩國は秀衡が身帯なれば、下り給はば、無下には争でか計らふべきと申したりしゆゑに、思ひ立ち給へり。

(遮那王海道下)

陸助重頼、大番明けて本國へ下るにより、橘次と示し合せたれども、重頼所勞ゆゑに滞り、

橘次、遮那王殿を相伴ひ、承安四年三月三日、鞍馬を首途<sup>かど</sup>、時に常に住み給ふ障子に、

飯りこん飯りこんとは思へ共定めなき世に定めなければ

と書き給ふとにや。

牛若丸の影、鞍馬にあり。古翁云ふ、往昔禪林房阿闍梨覺日、天性畫に達す。牛若丸の影を畫くと云ふ。何の頃紛失したるにや。鞍馬に其の沙汰なし。今有る處の牛若丸の影は、土佐某畫く所なり。兒の形、眉を取り長絹を着す。後に松竹を畫く屏風あり。左の方に太刀立て掛けて有り。同じく下に烏帽子<sup>方イ</sup>子宮笛あり。又本堂の傍<sup>かたはら</sup>にある中、魔王僧正左、役の小角右、牛若丸一幅に畫く。牛若の面相右に顯すと同じ。鞍馬寺僧の云はく、此の三像の畫、狩野元信に望むの處に、魔王僧正の姿を元信案ずるの時、心空に成つて、忽然と魔王僧正の形現す。元信奇特の思ひをなし、則ち筆を執つて此の姿を寫さんとする時、天井より一つの蜘蛛まひ下りて、彼の三像の姿を畫く如く糸を引く。元信其の跡を留め、成就するの後、俄に風吹き來たり、彼の三像の畫を吹きまくり、虚空を飛ばし、鞍馬寺の内陣へ吹き入る、世に奇異の思ひをなせり。則ち三像の姿を糸引きたる蜘蛛をも同じく畫く。鞍馬寺の内陣に有る處の三像是なり。

(一九) 熊坂張樊と云ふ盜人、加賀國熊坂の者とぞ。美濃國赤坂の宿にて夜討して牛若丸に討たれしと

云へり。

(二〇) 傳に曰く、張樊の事、十三の歳、伯父の馬を盜み市に出でて賣りしより鍛鍊したるとにや。

二十一の歳法師になり、張良の張の字と樊噲の樊の字を取り、張樊と名乗る。國々の溢れ者を集め、其の將たるの由云ひ傳へり。由利太郎、藤澤入道、柳下小六、淺生松若、三國九郎、壬生小猿など云ふ者、其の頃の盜人と云へり。

遮那王、青墓に着給ひて、長者大炊が方へ立寄り給ふに、大きに歡びて饗し奉りしぞ。大炊は源氏の恩顧の者也。大炊が娘延壽は、義朝の愛妾也。大炊が姉は六條判官爲義の乙若丸以下四人の子共の母也。大炊が兄、内記平太政遠は、保元の亂の時殉死したるぞ。大炊弟、平三郎眞遠は出家して、鶯栖玄光と云ひて、義朝を内海へ送り奉り、長田が家人と戦ひ、勇武を顯したる也。大炊、遮那(王)殿に一向御家を興し給へと申したるとぞ。玄光を御供させんと云ひしを、季春止めしと云へり。

青墓の里人云ふ、遮那殿、長者大炊が庭前に楊枝を指して詠歌あり。さしおくも記念となれや後の世に源氏榮えばよし竹となれ 其の楊枝より竹となりて、枝葉茂りて今に有りと云へり。

(二二)  
遮那王、尾張國熱田大宮司祐範の方にて、三月十二日元服、前大宮司季範の娘、義朝の本妻也。是頼朝希義の母公にて、其の弟今の大宮司祐範也。烏帽子に小結して、裝束相調へ進らする。則ち源九郎義經と號す。

元服は烏帽子髪に髮先をかり、眉毛を剃り落し眉を作り、黒齒黒くす。上臙の元服都て此くの如し。烏帽子を初めて着すゆゑに首服共云へり。年二十までのこと也。堂上には十三に

して眉取り、黒齒付くる、十八歳までと云へり。東妻にて小結したる烏帽子を、昔は號なづけて牛若帽子と云ふ。又古代疊烏帽子と云ふ有り。たゞみたる烏帽子を着し、甲かざとを脱いで烏帽子を用ゐる時、直に疊烏帽子を曳き立てたると見えたり。保元物語に、宇治路へ安藝判官基盛承つて向ふに、淺黄絲の鎧に、上をりしたる烏帽子の上に、白星の甲を着すとあり。同本に、義朝御前へ召さる。赤地の錦の直垂、折烏帽子引立てとあり。皆以て疊烏帽子(二五)の事也。

前漢昭帝紀、元鳳四年春正月乙亥、帝加元服。注、如淳曰、元服謂初冠、加上服也。師古曰、如淳以爲淺服之服。此說非也。元首也。冠(者)首之所着。故曰元服。其下汲黯序云、上正元服。是知謂冠爲元服。如淳臣讚等漢書注者之内也。

義經大宮司の方に四五日逗留ましまし、其れより三河國矢矧の長が許に宿し給ふ。

世に云ひ傳ふ、三河國矢矧の宿の長者が娘、淨瑠璃姫、伏見源中納言師仲卿息女と云ふ。(二六)  
平治二年師長卿配所、室の八嶋へ下り給ふ時、三河の八橋にて、

夢にだに角て三河の八橋を渡るべしとは思はざりしを

と讀み給ひしを聞し召して、程なく召し飯され給ふと云ふ。矢矧に逗留の時、長者に相馴れ儲け給ふ子と云へり。母鳳來寺の藥師を信じて出生するゆゑ、其の名を付けた。美女にて有りけり。

義經長が許に逗留有りしに、姫が亭へ請じ奉り、笛を望み、姫も琴彈(ひ)き、酒宴を催す。義經姫(二七)

に密通契り給ふ。其の後、重頼も（出で）來たり。相伴ひ奥へ下り給ふ。姫は別れを惜みて勞り臥して、終に空敷なる。年十四、弄ぶ所の器物、鳳來寺に納むと云へり。

其の時の鏡、鳳來寺巖本院に今に有り。古代の物とぞ。義經笛の器量有りと云へり。或説（二八）に蟬折義朝に有りしを、常盤是を取りて御曹司に進らせしと云へり。駿河國有度郡久能山（二九）縁起に曰く、源義經有笛、號薄墨、寄進此寺、嘉祿年中回祿、笛も又焼失すと云ふ。

義經其れよりも下總國に着き給ひ、重頼が方に逗まり、橘次は奥へ下りしとぞ。義經深栖が館に在す内、其の邊の野に馬盗人有りて、人々騒ぐ。大の鬻男の大太刀を抜いて待ち掛けたり。重頼が家人を初め、是に辟易して猶豫ひ居たる處へ、義經御曹司走り來たり給ひて、小太刀を抜いて、彼の盗人の太刀持ちたりし腕首を、太刀の心にて強に打ち給へば、打たれて太刀を取り落す所を、太刀の心にて重ね敲に擣ち倒し、袴の腰を蹈み付け給ふ處へ、人皆寄りて搦めけり。其の形勢、凡夫の業に非らずと重頼を初めとして、皆々大きに驚きたり。其の上、下總國にても鳴黎は誰が領ぞ。打殺し押領せん、鳴黎が館は要害に能き所なれば、防ぐによしなど宣ひし程に、重頼も角ては平家へ聞えなんと持て扱ひ（て）居たしが、其の年の秋、とても思召す事あらば猛勢の者こそ便も候へ、重頼などが領幾（ばく）ならず候へば、秀衡が方へ御越しあつて、能々昵近みおはしませかしと申したりしに、御曹司も、實にもとや思召しけん、さらば下らばやとて、九月中旬に出で給ふ。小侍一人、僕從二人添へて送りけり。

（二〇）  
深栖陸助、舊本に重頼に作る。頼重也。兵庫頭源仲政二男、三位頼政弟、深栖三郎光重子

也。

(遮那王奥州下着)

上野國松井田と云ふ處に宿し給ふ。主の男二十四五計なるが、頬骨つゝこ何様用なんじやうに立つべき者と見給ひて、若しもの事あらば、旗指はたさしにもよかりなと思召し、自然の事もあらん時は頼むべしと宣へば、主あるじの云はく、殿はいまだ少年の身として、何事の有りて自然の事の有りとは宣ふぞ。何事ぞ。有り有らばなば其の時の事にてこそ候はんとて、しかく共云はず。心の内にては、何様いかさま白癡者哉。馬盜人うばしござんなれ。但し色好き小冠者なれば、人の濫おぼれて心を許ゆるさせ、夜盜の引入ひきいれせん爲かと思ひ、心を許さざりけるとにや。(三二)平和泉に着き給へば、秀衡、我が館へ入れ參らせ、兩國は秀衡が身帶なり。嬪みづよき冠者殿なれば、子なき者は子にもし、娘持ちたらん者は智公にも取り奉りなん。其の内は秀衡が方に御坐せとて、最愛いとほしみけるとぞ。

(鬼一法眼・義經上洛)

都一條堀河に陰陽師鬼一法眼と云ふ者有り。希代の軍書を持つ。是醍醐帝延長元年五月、從三位中納言大江維時(三三)、遣唐使に大宋國へ遣はされし時、龍取將軍に逢ひて傳來の軍書也。黃石公、張良に傳ふる所の兵書と云。(三四)維時七代の後、式部大輔匡時告げに依つて鞍馬へ奉納有りし秘書也。鬼一、夢想を請け、奏聞を經、下し預ると云へり。義經是を聞き給ひ、甚だ執心し、

都へ上り拵へて見ばやと思ひ立ち給ふとにや。橘次季春が京上りを幸ひに、安元二年二月十一日、平和泉を出で給ふ。道にて橘次に宣ふは、下りの時、上野の松井田と云ふ所に宿したり。

主の男、何様用いかさまに立つべき者と見えたり。松井田に宿して、彼の男の方へも尋ねて見ばやと宣ひて、松井田に宿し給ひ、義經以前の主の方へ尋ね給へば、主立ち出で、此此前イれ以前も見えたる

人よ。何の用ばし有りて來給ふぞ。家の内の物に用事侍るかと云ひたるに、義經、吾は人の心を頼みて用有り。但し和殿は器用の人なるに、かゝる所に住み給ふ事ぞ。當時平家の繁昌なる

に、都へ上り平家方を頼み身を立て給はざるやと宣ひければ、主、呵々かゝと打咲うわひ、無益の事を宣ふ物哉。吾は未だ目あり。耳あり、何の用に平家の被官に成るべきや。喰はむ物無くば（頸

拘りても死ぬぞかしと申したり。義經、倍きは和殿は平家の人々に仇あだ有る人歟。主、詮無き事を云ひ出し根問ねひし給ふぞ。某は生國伊勢の國の者にて候。親にて候者は、河嶋二郎俊盛と申し

て、勢州三重郡河嶋と申す所に住み候。俊盛が親、左衛門尉俊實、堀河院の北面にて、彼の河嶋を賜はり、代々領して候所、某四歳の年、親にて候俊盛病死して、母計にて候を、伊勢守

景綱、彼の河嶋を押領す。母吾を連れて都へ上り、此の事を平家へ訴ふといへども、馬の耳に風の吹くが如く、用もなきやつ哉とて、景綱が代官に云ひ付けて、河嶋を追ひ出されて候。

某十七の歳、河嶋へ行きて、景綱が代官を夜討にし、其れより鈴鹿山の麓に居て、景綱が古市より京上りするを待ち請けて、一箭射ひとやばやと思ひ候に、何者の云ひけるにや、山賊の有るぞとて押寄せたるに、太刀抜き合せ切り結ぶ。然れども大勢に取籠められ虜いけとられて、此の所へ流さ



れ、六年を経候。殿にも若し迷ひ歩<sup>あ</sup>り給ふ人ならば油斷はしし給ふなどぞ語りけるによりて、義經、吾は義朝の子の由宣ふ。主大きに驚きて、さればこそとよ、只人にてはなかりけりとて、座を立ち退<sup>しりぞ</sup>きて、次の簀子<sup>すのこ</sup>に蹲踞す。義經、自然の事も有らん時は頼むべしと宣へば、速<sup>はや</sup>今日より主君と仰ぎ奉らんと云へり。伊勢三郎武盛と云ひたりしを、義の字を賜はり、義盛と名乗る。其の時隨ひ奉りてより二心なく忠勤を抽んで、名を今の世まで殘したりし伊勢三郎義盛是也。則ち御供仕るべきとて、屬<sup>つ</sup>き奉り暫く在京したりが、故郷も心元なく思ふらんとて、義盛をば上野へ販し給ふとぞ。

義盛親俊盛の宅地の跡同一塚、勢州川嶋にあり。<sup>(三七)</sup>

義經、都一條大藏卿長成朝臣の方へ上着有りて、後、四條の聖門房をして、一條堀河の鬼一法眼が方へ宣ひたりしぞ。

吉岡本に、四月廿日義經法眼が方へ來たり給ふと云<sup>(三八)</sup>。

鬼一法眼、生國伊豫國吉岡の者とにや。<sup>(三九)</sup>都へ上り陰陽師にて有りしぞ。宇治殿の諸大夫、式部

大輔盛憲が所縁によりて、頼長公法眼になし給ひて、吉岡法眼憲海と云ひたるとにや。童名鬼<sup>(四〇)</sup>

一丸と云ひしゆゑに、宇治殿常に鬼一法師と召さる。是に依つて世人も鬼一法眼と呼びたると云へり。義經烏帽子に小結して、絹紋紗の直垂、白き大口、金作りの太刀、虎の皮の尻鞆<sup>しりぞ</sup>入れて兒立なれば、(眉取つて)黒齒<sup>かみ</sup>黒にして、時に年十八歳、麗質婦人の如し。聖門房、伊勢三郎其の砌りにあり。

目利書曰く、金作りの太刀、備前友成作、二尺一寸。

(四一)

法眼衣の下に葛の袴、銀にて柄鞘卷きたる刀を差し、女二人に介錯せられ、座に居り、御曹司

(四二)

を席に招き、詞細かなりと雖も、兵書を深く秘して出さず、是に依つて義經、法眼が娘と密

通、彼の祕書を娘に偷み出させ、寫し取り、悉く其の指要を納め得と云。

(四三)

張商英天覺が素書の序に曰く、夫れ素書六篇は、按ずるに、列傳黃石公圯橋で所授子房者也。世人多以三略爲是。蓋傳之者誤也。晉亂有盜、發子房塚、於玉枕中獲此書。凡一千二

百四十六言と云。下略。

### (湛海被斬)

法眼門弟に白川の湛海と云ふ者、一年出雲路の印地の時四五人にて持つべき石を輕々と投げたるにより、世人岩投げの湛海と云ふ。彼の祕書を度々望むと雖も、法服許さず。義經寫し取り給ふ事を聞きて、甚だ憎み法眼に支へたり。姫に通じ給ふ事は(兼ねて)法眼も聞きたれども、猶豫したる所に、祕書を取られ腹立したる氣色(して)云ひけるは、重衡朝臣の度々宣ひしだにも用ひずして、かゝる事を仕出でたるこそ奇怪なれ。平家の公達を嫌ひて、源氏を乞賀に致し、したるなんど入道殿聞き給ひては、以ての外の大事故なれ。殊更彼の人の子を姫懷妊したるの由、一味の科通る所なし。いまだ披露なき前に追ひ失ふか、所詮討つて捨つるかの外あらじと思ふの由云へり。湛海云はく、彼の人五條の天神を信じて、毎度參詣有り。其れをうかがひ聞討

にすべきの由云ひて退出するを、法眼が仕女障子を隔てて是を聞き(て)、桂女に密に語る。姫驚き御曹司に告げたり。義經此の由を聞きてより、毎夜天神へ詣うで給ふ。桂女止むると雖も欲せず。十二月十六日の夜湛海、溢れ者共四五人集めて、五條の天神の門前に待ち掛けたるに、義經事共せず、湛海が持ちたる長刀の柄を切り折り、湛海共に二人當座に斬り殺し、残りは追ひ拂ひ、其の身は恙なくして堀川へ飯り給ふが、爰に長居しては此の事露顯し、若し犬死する事もや有りなと思ひ給ひて、其れより山科の増尾兼房が方へ立ち退ぎ給ひしとにや。

傳に曰く、鬼一が女、實は二位大納言藤成通卿の桂の女と云う妾の腹の息女と云へり。

三歳にて成通卿に離れ、母に添ひ桂の里に居住ゆゑに桂姫と云ふ。四歳の年母を法眼嫁り、其の時姫をも子にしたるぞ。十四の歳、建春門院へ召されて参りしに、美女の名を得たり。

去年六月十二日女院相模守業房が淨土堂へ御幸の時、御酒宴有りしに、藏人頭重衡朝臣桂姫に一向閃めき給へるも、姫更に齊解せず。其の後人しても度々宣ひ、又父法眼も

幸ひに思ひ、僞寄しけれども承引せず。女院弱じ給ひて、父の許へ飯り住みしにも、慕ふ

方のみ多かりけれども、一度の返事だにせざりしに、去る五月義經に傾き、其の志深く、

義經は又姫の嬋娟たるを歡び、偕老の契り昵近じかりしぞかし。然る處に義經法眼の許を立ち退き給ひしにも、姫は愛着の思ひ絶えずして、其の跡を慕ひ、山科に來(たり)親の方へ皈らず。

母は是を歎き法眼も争がとがめもあらんかと思ひ按じけれども、何の沙汰もなかりし程に、東光房の圓忍は義經の師檀、法眼が爲にも檀越なれば、圓忍阿闍梨兎角有

めて、義經と仲直りさせ、姫をも法眼呼び返したりと云へり。

安元三年三月二日、桂姫義經の息女を産後、桂姫空しくなる。年十八。死骸を鞍馬に葬るとにや。此の息女を以て伊豆守仲綱男、右衛門尉有綱義經の賀となる。

按ずるに、鞍馬掛取谷の一塚は鬼一法眼の娘の墳墓なるべし。吉岡本に、源賴義朝臣伊豫

守たりし時、彼の國にして七所に八幡を勧請あり。同じく七佛藥師の尊像を七所に安置し

給ふ。其の頃官儀杖と云ふ者あり。實方中將の子孫なり。豫州桑原寺にて出家して。儀杖

律師と云ふ。賴義此の律師をして湯月の八幡の社僧にし給ふ。又賴義の四男、伊豫權介親

清、河野新大夫親經の賀として、其の家督を繼ぐ。然れども子のなきことを親清室家歎き

て自ら豫州三嶋大明神に參籠通夜ありしに、宮内に大蛇顯はる。是三嶋大明神なり。室家

更に怖れずして、彼の大蛇と密通有りて懷妊、男子を産めり。河野通清是なり。通夜して

儲けたるゆゑに、通の字を家の通り字とす。又律師祈禱の丹誠を抽んず。之に依つて河野

の祈りの師として、親清夫婦信心あり。其の儀杖律師四代の孫、伊豫の吉岡にて出生、鬼

一丸と云う者、法師になりて吉岡憲海と云ふとあり。

又同本に、法眼も牛若殿と知りたれども、詞にも出さざりけり。我が先祖儀杖律師の事、

賴義朝臣の恩顧の者なりと申して、我が主の子なんどを持賞すごとくにぞしたり。軍學を

傳ふにも、其の利慧勝れて器用なりしゆゑ、法眼も世に祕藏の人に思ひけり。彼の祕書を

望み給ふ時も、法眼云はく、乞ひ願ふ者多く候へども、一人にも見せざれば、其の聞え憚

るゆゑ、今は叶ふべからず。見せ奉る時節も有りなるとて、見せ参らせざるゆゑ、姫に通じ彼の軍書を寫し取り給ふ。湛海も兼ねて此の書を度々望めども、許容るさざりしに、此の事を聞きて、甚だ憎みて法眼方へ來たり、義經のよしを云ひ、又姫君の事は、重衡朝臣の度々宣ひし時、所勞の由にて返事なしなど支へたり。此の法師後藤兵衛盛長と親しく、重衡の姫が方への艷書も此の法師媒なかだちしける程に、若し平家へ告げられては惡しかりなんと法眼も思ひ、今初めて聞きたる躰に持賞もてなし、湛海と相談したるに、湛海も云（はく）、かの小冠者五條の天神信じ参詣する程に、某付け行き闇討にすべし。姫君の事は彼の子を懷妊、月重なるの由なれば、其の間は勞いたはり（いまだ）宜よろしからずと披露有りて、産後必ず藏人頭殿へ参り給ふやうに計らひ給へ。重衡朝臣の前は能く繕つくろひ、又盛長をも能く能くこしらへ待らんとてゐる。法眼も詮方なく思ひ、急ぎ此の事を妻に語り、姫に通じ義經の法眼の方を立ち退き給ふやうに計らひけれども、義經此の事を聞きて、曾かて驚き給はず。此の法師遣り立ててこそ後の害にも成るべし。三日はすぐさせまじきと宣ひしとぞ。終に天神の門前にて湛海は討たれたり。同本に、義經山階へ立ち退き給ふ時、姫の局の庭に楊枝を指して、詠歌有り。

（五一）  
後の爲指しおく楊枝根延びしてつひにむすばん青柳の絲

姫も楊枝を指して返歌、

我も又結ぶしるしの玉柳いとゆひかはす枝なわすれそ

其の楊枝根(五二)つきて後は大木となり、二本相並び、鬼一が宅地に有り。名付けてしるしの柳と云ふとぞ。

古翁の云(はく)、文明十年臘月十五夜に、若宮(五三)の御方より姉小路基綱(五四)の妹に賜はると奥書書イのある繪草子、義經虎の巻と云ふあり。鬼一が軍學書イの事なり。其の雙紙にもしるしの柳の事、此の歌あれば昔は有りたるにや。兵亂の頃焼けたるにぞ有りなんと云へり。

治承二年十月十日鬼一法眼卒。祇陀林寺に葬ると吉岡本に有り。

(増尾十郎權頭兼房)

増尾十郎權頭兼房(五五)は、近衛院の役人にて有りしぞ。常盤の門葉にて義經の乳母めのとの親也。丹波(五六)の國馬路むまぢの郷を領知せり。彼の所の百姓と平家の侍、越中守盛俊が領分の百姓と水掛の論に付き、兼房が百姓を農具にて打殺したり。兼房此の事を聞き、安からず思ひ、殺されたる者の一子十四五に成りける童に、吾が家人を相添へ、盛俊が百姓の家へ押込み、念なう敵を討たせたり。此の事兼房が所爲の由にて善惡の沙汰もなく、清盛公の計らひにて、馬路の郷を沒收せられて、山階の音羽の郷に閑居したり。

(武藏房辨慶)

武藏房辨慶(五七)の事、安元二年六月十二日の夜、五條の天神にて初めて見参したるとぞ。義經時

に十八歳、辨慶は二十六の歳の事也。辨慶色々義經を黷りしゆゑ、後には口論になり、打物の勝負に及ぶと雖も、辨慶叶はずして飯りしと云へり。同十七日の夜、五條の橋にて行き逢うたり。此の度は勝負に依つて、負けたらん者家人とならんと約諾して戦ふ。此の時も辨慶勝つ事能はず。是より主君と仰ぎ、其の心金鐵の如くにして影の如く付き屬ひ奉り、忠勤を盡したる文武二道の者と云へり。

或は曰く、義經の窺竄なるを思ひて辨慶随ひたるとも云へり。

(五八)

辨慶は山門西塔櫻本房辨長僧都の弟子、西塔北谷定泉房付きの中房と云々。又西坂本一乗寺村に櫻本房月輪寺の舊跡あり。東坂本田地の異名にも櫻本屋(敷)と云ふあり。是は里坊の跡歟。

辨慶寺の古跡、西塔北谷にあり。辨慶屋敷鴨川の東二條と三條との中間にあり。所の者辨

慶芝と云ふ。

(五九)

廣田社日次記に、安元の頃五條の橋に夜遊の僧有りて、往來の人を辛苦すとあり。辨慶が事歟。

(常陸房海尊)

(六〇)

常陸房海尊の事、園城寺の出家、刑部卿禪師と云へり。強力者ゆゑ荒刑部と云ひける。義經法眼が許に在(りし)時も志を通じ敬崇ひける(と)也。平家追討の時義經に屬し、常陸房海尊と名乗ると云ふ。

## (鈴木重善)

紀州熊野の住人鈴木二郎重善と云ふ者有り。是は鈴木庄司が弟也。(安元二年の頃)在京したり。八月十五日佐女牛の若宮八幡へ参詣せし時、宮前に於て歳の程十七八計なる人の兒立かと見えて、眉取つて黒齒黒なるが、繡紗の直垂、精好の大口着て、金作りの太刀を佩き、沙門二人伴ひたるに行き逢ひたり。重善も誰人やらんと思ひて過ぎ行きたり。其の後重善鞍馬へ参りて、東光房の許に寄りしに、晚景なれば彼の房に宿したる處に、若宮にて見たる僧の立ち出でて饗しけるに、重善、以前佐女牛にて見奉るの由申すに、圓忍阿闍梨の弟子、禪林房の阿闍梨の由、重善、其の時の兒立の御方は誰人なれば麗質なる由稱美したり。禪林房、吾が門葉なりと答ふ。通宵物語の序に(禪林房)重善が心を曳き見んが爲にや、往昔の事など語り出し、今にも源平の亂出で來たらば、何れへか参り給はんやと尋ねしかば、重善、壁に耳、岩の言ふ世の中なれば申しがたし。某が親にて候重邦は、六條延尉に不便を蒙むりし者也。前の熊野別當行快は、爲義の外孫、今の別當湛増は平家の恩顧を厚く請く。其の時代變つて人の心も計り難し。行快は指出でたる心も無き人にて、爲義の末子、十郎義盛とて、熊野の新宮に居給へども、さのみ睨じからずと語りて、やゝもすれば源氏の鼻屑口なるゆゑ、覺日重善が心を見て、以前佐女牛にて見給ひしは、故左典厩の末子、當寺にて育立ち給ひし牛若殿也。昨日幸ひに當房へ來たり給ふの由を云ひて、義經を呼び出し、引き合はせ奉る。重善座を立て、又手申し



けるは、人定<sup>にんぢやう</sup>にて存ぜざる事こそ本意無く候へ。某紀州熊野の住人鈴木二郎重善と申す者にて候。某が親にて候重邦、六條廷尉公の御恩を厚く蒙<sup>も</sup>りし者にて候。白川院の御時、教眞を熊野の別當に補せられし時も、六條殿の御息女、龍田姫君を教眞へ遣はすべしの由勅定にて遣はされし時も、重邦方へ（先づ）龍田姫を入れ奉りて、重邦が方より別當の方へ入れ給ふにより、重邦は教眞偏に親の如く持賞<sup>もてな</sup>し給ふ。廷尉公も熊野へ渡らせ給ふ時は、必ず重邦が方へ入らせ給ひて、餘<sup>よ</sup>に不便の思召にてこそ候ひしに、思はざる保元平治の亂出で來て、御一門悉く失せ給ひて、平家一統の世となりし程に、餘りに心憂き事に存じ、新宮十郎殿へ音信<sup>おとづ</sup>れけれども、如何思ひ給ひしにや、昵<sup>ひつ</sup>じき沙汰もなく過ぎ候ひき。土佐の御曹司四國に御座<sup>おは</sup>ませ共、蓮池權頭が前を思ひて見參にも參らず、右兵衛佐殿、又六郎御曹司は國を隔て給ふ事なれば、音信<sup>おとづ</sup>れ奉る事もなく、都にこそ頭殿の公達渡らせ給へども、御法躰の御姿、君も當寺へ入らせ給ふ由承り、天晴<sup>あつぱ</sup>御出家無き様にと心底には存じ候へ共、世の風俗に流石<sup>きうせき</sup>曳<sup>ひ</sup>かれて、今まで見奉る事もなかりしに、去る頃奥の方へ御下向の由承り、如何なる御心もやと存じ候ひしに、不思議に見奉る事の嬉しさよとて、落涙したりけるに、義經も禪林房も重善が詞を感じて、共に泪<sup>なみだ</sup>を流し給ふ。其の夜通宵語り明して、翌日重善は皈りぬ。其れよりして誠に二心もなく志を通したりとぞ。治承平家追討の時、重善所勞ゆゑ、甥の鈴木三郎重家、龜井六郎重清兄弟を義經の家人に參らせ、付き従ひ奉り、甚だ以て忠勤をなす。鈴木三郎重家は平家亡びて後、老母所勞<sup>いたはり</sup>に付き、紀州藤代に有り。義經都をひらき給ひて後、其の御先途しれざりしに、奥州に在<sup>ま</sup>す由を

聞きて、文治五年の春、藤代を忍び出でて奥州に下る。伯父鈴木二郎重善、是も義經に志深く、重家が跡を追ひて奥州に赴くの時、三河國矢矧<sup>やはぎ</sup>にて足を損じて勞り遅引す。其の内に義經没落の由を聞きて、三州賀茂郡高橋の庄、矢並<sup>なみ</sup>の郷に住す。時に落髮して、鈴木入道善阿彌と號す。<sup>(七〇)</sup>猿投山<sup>さるなげ</sup>にして一字の精舎を建つと云。

當時鈴木の姓多くは此の善阿彌の後胤と云。鈴木<sup>すずき</sup>の系圖に曰（はく）、人王五代孝明天皇五十三年戊午化人あり。岩基限<sup>くま</sup>の北、新宮御山に於て、十二所權現と崇め奉る。是を新宮と號す。垂跡の初め、權現龍に乗り、千尾の峯に降臨あり。奉幣使の氏人を召さるる時に、漢司符將軍の嫡子、眞俊進み出でて、權現を新宮鶴原明神の前に十二本の榎木<sup>えのき</sup>の本に崇め奉る。之に依つて榎木の姓を賜はる。二男基成は丸子の氏を賜ふ。三男基行は御馬の草稻を獻ず。之に依つて穗積の姓を給はる。是鈴木龜井の祖也。

（鷲尾三郎・源八廣綱・江田源三・熊井太郎・駿河二郎）

鷲尾は播磨の國鷲尾庄司武久が嫡子也。義經鴨越を落し給ふ時、案内者に召され、熊王丸と云うて、歳十八にて有りけるを、元服させて、則ち諱の字を賜はり、鷲尾三郎義久<sup>(七二)</sup>と付け給ふ。父武久は元來備中の國の者也。領地を平家の爲に押領せられ、浪々して播州鷲尾と云ふ所に住すと云へり。

今に武久が末流彼の所に有りと云。

(七二) 源八廣綱は信濃の諏訪の一族也。平家追討の時、(七三) 廷尉の使に上り、院より兵衛尉に成さると云うたぞ。

(七四) 江田源三弘基、是も清和源氏の庶流とぞ。

熊井太郎忠基は丹波國の住人、(七五) 志内景澄が甥也。伯父景澄は平治の時、惡源太義平の方人して討死せり。

駿河二郎清重の事、義經駿河國浮嶋が原を通り給ひし時、獵人有りて行き連れ、終道物語する。如何なる者ぞと名を尋ね給ふ時に、駿河國、竹下二郎清重と答ふ。其の時見參し奉りて後、義經平家追討の節、清重を尋ね給うて、則ち家人となり、(七六) 駿河二郎と云へり。平家亡びて

後、頼朝義經の中不和になりて、義經奥州へ落ち下り、秀衡を頼み給ふ時、秀衡頼朝公と不和にして、義經を鼻<sup>ひな</sup>舐<sup>め</sup>し奉る事強し。依つて秀衡と示し合はせ、時々鎌倉の案内を窺<sup>うかが</sup>ひ給ふ。物見を鎌倉に竊盜<sup>しりび</sup>入れ置き、鎌倉の事を奥州へ通ず。清重も其の竊盜<sup>しりび</sup>の内にて、山伏の姿に成りて、鎌倉に隠れ居たるとも云へり。西國中國の者を頼み給はんが爲に御使に遣はされたりとも云ふ。(七七) 固瀬川にて舟越の者に見咎められて討たれたると云。

(七七) 鎌倉假粧坂の上に六本松あり。清重此の所に休み居て鎌倉を見降<sup>おろ</sup>したる所と俗語に云ふ。

又固瀬川の西、民家の後、竹藪の際に、清重笈を燒きし所とて松あり。笈燒松と云ふ。片瀬川は清重戰死の所と里人云ひ傳へたり。

## (備前平四郎)

(七八)

(備前平四郎成春事、久我内大臣雅通公の諸大夫、備前守平兼房が男也。安元三年の夏、或夜

(八〇)

(義經世尊寺の邊にして、松殿基房公の青侍四五人行き連れ通りしが、月の旭かりし影にて、御

(八一)

曹司を見て、かかる諱しき人こそなけれどと戯ぶれたりし程に、義經も酒に酔ひたる者よと思

ひて偽寄し宥めて行き過ぎ給ふを、四五人の者共手を結び合ひて、通さざりしゆゑ、既に事に

ならんとしたりし處に、前廉より義經の跡に付きて來たる男一人有りしが、此の由を見て中へ

走り入り、兎角(無事に)宥めて、殿下の青侍共を先へ飯し、御曹司を守護したる躰なりしゆゑ、

義經、御邊は誰人ぞ。某をも見知り給へるにやと宣ひしに、兼房申す様、日外長成公にて見奉

り候。君は正しき故左馬頭殿の御公達にて渡らせ給ふに、危き御舉動かな。某は本國越後の城

の氏族にて候處、城資國と中惡しく妨げられ、本國を浪々の身と罷り成り、只今は久我内府殿

(八二)

の仕官となり候と申して、長成朝臣の許まで送り届け、最懇に敬崇ひたり。義經も禮をなして

飯し給ふ。木曾退治の時入洛有りて、備前守を尋ね給ひしに、終命りたりしゆゑ、一子備前平

(八三)

四郎成春を家人に仕ひ給ふとにや。

## (鎌田兵衛娘牛王)

(八四)

(鎌田兵衛が娘牛王は、新平判官資行に嫁し、最最愛したり。資行が母は牛王が母方の叔母

(八五)

鎌田兵衛が娘牛王は、新平判官資行に嫁し、最最愛したり。資行が母は牛王が母方の叔母

也。牛王常に平家の繁昌を冷眼く思ひけるにや、或時何となく資行に云ひけるは、吾が方様の人々は、有るか無きかの風情を見聞くに付けても、口惜しく侍るなり。君御志變らずは、若し源家の人々の思ひ立ち給ふ事も有らば、必ず力を合はせ給はんにと云ひたりし程に、資行、斯く夫妻の機關をなす上は、疎略すべきに非らず、若し思ひ立ち給ふ御方も有らば、一番に資行こそ参らめと語るに、牛王も女心の無臺もうちとけ語る程に、平家の繁昌を憎み、源氏の衰へたる形勢を歎きたり。或黄昏に監物太郎頼方が弟、武藤小二郎資頼、新平判官が方へ音づれたり。折節月限なく亭に差入りたる景色、最面白かりければ、酒など出だして饗しける。兩人數盃を傾けし程に、資行沈酔の餘りにや、牛王が常々語りし事などを云ひ出だしたるに、牛王はしかくの由諍ひけるを、資行、諍ひ給ひそ。其の時は斯く宣ひたり。何日は加様に頼まれしなど、白地に云ひし程に、（資頼聞きて）今此の世にかかる心の付きし事以ての外也。我が兄頼方など若し聞きなば、資行までも難儀なるべし。努々有るべうもなきことと制したるゆゑ、牛王も争で女の思ひ侍るべきや。判官殿の酒狂の癖也と陳じける程に、資頼も實に左有る覽、誰も沈酔しては無若なき事酒の習ひなど云ひしを、資行、我は酒には酔はず、正しく斯く牛王が我を頼みたる詞の相違する事の意得ずと云ひて、持ちたる扇子にて牛王が頭を敲きたりし程に、髪をも打損じて取り亂したり。牛王も興醒めて思ひけれども諍はざりし。資頼も漸々と是を宥めて飯りしとにや。安元二年正月三日、義朝政家十七回忌に當れり。其の方樣の人々圓覺寺にて如形佛事作善經營みたりしに、牛王も母と共に彼の御堂に宵より通夜して飯

逢に昵しき者の方へ立寄り、其の夜は彼方に逗留り、明る四日に牛王資行が方へ皈りて、しか  
 づの由を云へり。資行以ての外なる氣色して、佛事はさる事なれども、道の逗留密夫の爲に  
 や。但しは源氏の方人を頼まんが爲かと云ひて散々に打擲す。牛王は聊かも諍はずして、最前  
 酒狂と思ひしに、かかる不覺人とは知らずして、昵まじく思ひたる我が心の癢さよと思ひて離  
 れになり、資行が方を退けて、母が許へ皈り住みたり。資行が母は一向に牛王が我意に任せて  
 資行を嫌ひしと意得たりし程に、或時資行が母、鎌田が後家の方へ音信れし其の時節、義經鎌  
 田が後家の所に居給ふを見て、其の翌日資行が母、平判官康頼が方へ行きて、牛王が資行を逆  
 けたるこそ謂れ候。今は牛王、牛若御曹司と機關をなして、偏に謀叛の事を勸むると聞え候な  
 ど語らひ出だしたるに、康頼聲を嗔悲し、かかる卒忽なる事を承り候物哉。當時誰有りて謀叛  
 と云ふ事思ひ立つべきや。其の上九郎御曹司いまだ二十にだに成り給はぬ人を、誰か方人すべ  
 き。此の事露顯せば、誠か偽を正されん時、若ししからざる時は、猶も寔を聞かん爲、御方を  
 も責め問ふべきなれば、其の證據なくば、由々しき身の大事になるべしと云ひたりければ、女  
 は相違して、穴賢、人にな洩し給ふな。告げ知らする者有りて斯くは申したり。其の實を知ら  
 ず、若し平家へ聞えては、身の爲如何に候とて、母は皈りぬ。其の夜に入りて、康頼資行が方  
 へ越えて、斯う斯う母儀の宣ひしぞ。努々有るまじき事也。牛王女の不縁の事は世に有る習な  
 れば、強ちに尤め給へる事に非らず。大事の儀にて候程にと制して歸りたると云へり。此の康  
 頼は左馬頭（殿）の代にも常に参りしとぞ。弓馬の事など義朝の宣ふ旨を信じたととなり。左

典厩亡び給ひし後、康頼尾張國の守護たりしゆゑ、水田三十町を寄附して一字の精舎を建立し、義朝の御菩提を弔ひ奉りしと也。

今の内海の大坊是なり。

(八八)

建久元年十月廿五日、頼朝公、左馬頭殿の御廟へ御參詣の時、須細治部大輔爲基に御尋ね有りしに、しかゞの由申す。康頼の厚志を感じ思召され、御褒美有りしとぞ。後代の驗に我が像をも圖し置くべきとの仰せ有りと云々。其の時の頼朝公の御影、今に大坊にあり。義朝を討ち奉りし測殿の跡、内海の田上と云ふ處にあり。同じく御頭を濯ひし所として、大坊の門前に小池あり。玄光、(八九)金王丸等長田が家人と戦ひし所として小橋有り。亂れ橋と云へり。大坊に其の時の縁起具さにあり。義朝並びに政家が墳墓有り。至りて古し。長田忠致、先生景致、(九〇)地礫に掛りし所としてあり。

(關原與市・牛王最後)

(九一)

安元三年初秋の頃、美濃國の住人、關原與市重治と云ふ者在京したり。私用の事有りて江州へ赴きたり。山階の邊にて御曹司に行き逢ひ、重治は馬上、時節雨の後にて、蹄蹟に水の有りしを蹴掛け奉る。義經其の無禮を尤めて重治終に討たれぬ。家人は皆逃げたり。重治が男犬王丸として十二三成る小童の小太刀を抜いて立ち向ふ。義經其の太刀を打落し、小童の健氣なる形勢を見て打捨てて通り給へり。

今此の所を蹴<sup>け</sup>擧<sup>あ</sup>と云ふ。清水あり。蹴<sup>け</sup>擧<sup>あ</sup>の水と云ふ。重治が討たれし所と云ひ傳ふ。

犬王丸が母方の叔父鮫<sup>さ</sup>嶋<sup>ま</sup>平次と云ふ者如何聞きたりけん、犬王丸が後見して、夜更<sup>よふ</sup>に鎌田が後家の門を敲<sup>たた</sup>き、平相國殿より御使なるぞ。爰を開けよと喚<sup>よ</sup>ばはりし程に、牛王は平家より御曹司の討手來たると心得て、小長刀を取りて待ち掛けたるに、内は暗し、鮫<sup>さ</sup>嶋<sup>ま</sup>を初め猶豫<sup>たう</sup>ひ居たりしに、猶も構へて待ちたらんには、左右なくは取られまじきに、女心の無<sup>は</sup>墓<sup>か</sup>さは、小長刀を打振つて奔り出でたりし程に、不才<sup>あへなく</sup>生捕<sup>な</sup>られたり。禁<sup>い</sup>肆<sup>まし</sup>めて大宮を下りに五條の邊まで連れ行きけるが、道にて刺し殺し捨てたるとにや。牛王が下女、片岡弘經<sup>(九二)</sup>が方へ馳せて、此の事を告けたるに、弘經兄の片岡二郎經春、去年より大番役にて在京せり。伴ひて弘經も京にあり。女を思ひて鎌田が後家の近所に通ふ。其の夜彼<sup>も</sup>の女の方に有りしが、太刀取つて追ひかけたれども、早敵<sup>な</sup>の者共行方知れずなりぬ。牛王が死骸<sup>しかい</sup>の途中に有りしを肩に打掛けて歸りしに、母は啼<sup>な</sup>く泣く六波羅蜜寺の僧を頼みて、死骸<sup>しかい</sup>を彼の寺の内に葬り、佛事作善<sup>ねんごう</sup>を懇<sup>い</sup>に經營<sup>いとな</sup>みしと云へり。牛王は鎌田政家が乙娘にて、今年二十一なり。去る平治の亂の時、政家三條堀川の吾が宅に火を掛け落し時、妻は兄二人の子を步行<sup>あゆま</sup>せ、牛王を抱懷<sup>いだ</sup>きて逃げ延び大宮に住みしとぞ。

六波羅蜜寺の内に東向の小祠あり。辨才天なり。俗語に、牛王女を鎮<sup>まつ</sup>りし社なりと云ひ傳ふ。<sup>(九五)</sup>

(義經奥州下向)

其の頃平相國の常盤が子ども皆法師になせと云ひつるに、誰が計らひにて牛若丸をば男にな



したるぞと宣ひたる由沙汰有りしを聞きて、常盤も長成朝臣も薄水を踏む心地して、急ぎ奥へ下り給ふべしと宣ひ、鞍馬の阿闍梨も兎角諫言め給ふゆゑ、さらば下るべしとて、八月中旬都を立ち給ふ。聖門房は京都の事を通ぜん（が）爲に都に止まり、辨慶法師、片岡八郎は供したると云へり。

（義經平家追討）

義經二十二の年、治承四年頼朝公義兵によつて、平和泉を出陣有り。十月廿一日黃瀬川の宿にして初めて頼朝公に謁し給ふ。<sup>（九八）</sup>壽永三年正月入洛有りて、木曾義仲を平らげ、同じく二月平家三草山の陣を夜討にして、鶴越を落し、一の谷の城郭を即時に敗つて、宗徒の平氏を討ち取り、其れより讃岐の八嶋、長門の赤間壇浦にして、平族を悉く討つに、向ふ所必ず敗らずと云ふ事なし。圖る所必ず落ちずと云ふ事なく、其の右に出づる人なし。弱冠の時より、心猛く勇ましくして、其の戈先に向ふ者なし。先祖頼義義家等の師を尋ね求め、鬼一法眼が軍法の奥義を究め、秀衡などにも常に清衡等の軍慮を聽いて、其の道を得度有りと云へり。一の谷の軍散じて後、首實檢の時も、後藤兵衛實基父子二十五騎にて前に備へさせ、田代冠者信綱十八騎にて前の妻手<sup>（九七）</sup>に立つ。義經は赤地の錦の直垂に紅綴の鎧を着、鉾形打つたる甲の緒を締め、薙刀を横たへ、曲录に腰を掛けて中央に有り。左に佐藤繼信、同忠信、鈴木重家、龜井重清、片岡弘經、熊井忠基、常陸房、江田弘基に構圍ませ、右には鎌田盛政、同光政、伊勢義盛、駿

河清重、源八廣綱、備前成春、八瀬勘八忠實、菊池八郎など備へさせ、堀景光、武藏房、佐志藤八長俊に分捕高名を正させ、三方の後には、義經の手の郎從五百餘騎にて打圍む。一町前には土肥、岡崎千餘騎にて支へたり。土岐、板垣八百餘騎、傍に畠山重忠、熊谷、平山あり。崎嶇の上にて頸共を集め、高名不覺をも尋ね給へり。舍兄の蒲殿は磯邊を差して逃ぐる敵を追はれるが、是を見給ひて、義經は意得ぬ陣の取り様不審さよ。敵は既に敗れしに何事有りてか斯く嚴しく陣す。九郎は勇也と宣へども、敵となれば能く怖しきにやと宣ひしとぞ。義經（此の事を）後に聞き給ひて、不覺なる蒲殿の兄ながらも加程に師の拙なき人にて御坐すぞ。將の軍に勝ちて首實檢して高名勝劣を尋ぬるに、油斷に兵を立てて有る時は、敵の溢れ者身を捨てて將の陣へ紛れ入り、將と刺し違ふる事（有り）、又兵二百騎、三百騎を汰へて直に駆け入る事も有り。然れば勝ちたる軍に思ひの外なる負をする物にて侍るぞ。其れ而已ならず、將の亡命立處に有るゆゑ、軍も負けて怖るる事なく、勝ちて油斷すること勿れと書かれしは是也。斯く軍の癢に御坐せばこそ、大手生田の森にて新中納言が郎從と不覺なる軍をし給ひしぞかしと川越の重房に宣ひしとにや。

元暦元年八月六日、義經左衛門少尉になる。使の宣旨を蒙り、大夫判官と云ふ。

頃曰頼政の嫡男故伊豆守仲綱の一子、伊豆の冠者有綱、歳十六、義經の智とす。

河越太郎重頼の娘朝爲姫と云へる、兼ねて美麗の沙汰あり。義經是を思ひ給へども、鎌倉殿の思召を憚る處、娶はすべきの由、頼朝公の仰せに依つて、八月十四日重頼息女首途す。重頼家

の子郎從等を付くるとぞ。九月五日婚姻あり。

(義經大嘗會前驅)

(二〇三)

同十月廿五日大嘗會の行幸義經前驅す。京童部の囁きは、同じ東の士なれども、木曾義仲は見懸より無形にして、鬢取り亂し、装束の衣紋片降りに言ひたる詞付き素媚びて咲しかりしが、義經其れには格別變つて、天性尋常に愛敬有りて、物毎に京馴れたる風情ぞかし。されども平家の人々のかかる時の爲躰には似るべくもなく劣りて見えたるなど諠きたるに、傍に藍摺りの直垂着たる六十計りの(男の)、辭言、左は宣ひそ。木曾は父帶刀義賢討たれし時三歳なるを、母抱懷きて信濃へ逃げ下り、乳母の夫木曾の中三兼任を頼みたりしに、兼任請取りて、木曾の山家に育立ち、信濃より外の事を十七八まではやはかゆめにも知らず、漸々に十計りにて京上りしたれども、山家育立ちの詞の拗強たるを咲笑はれて、京にもはかばかしき方へも出でずして、又木曾へ歸り住みしゆゑ、装束の衣紋などの曲みたるをも直す心もなく、只弓矢、力業而已にて、其の心計りを基とせし程に、京の者に逢ひては、物事癡に、咲しき事も理なり。義經は十六(の)歳まで鞍に兒して、京の差別も能く見聴き、其の年に奥へ下り給ひけれども、幾程もなく又京上りして、十八九まで京に住みて、都の事は甘きも酸きも能く知り給ふぞ。吾妻の事は無案内の事も多く有りなん。去々年先帝の御禊の行幸の時、平家の人々の供奉せられし分野、寔に其の事柄物馴れて優に、見懸けより物重く有りし事も、平家繁昌なれば

おのづから左は有るべし。今見給へ、源家の世となり武家の棟梁の御連枝なれば、天晴あつぱと他より見るにも重く優に氣高く見ゆべきぞかしと云ひたるとにや。此の時院の御厩うまやに立てられし甲斐國より出でたる黒の御馬を義經に賜はる。三寸の御馬とぞ。希代の逸物にて、其の身大夫の尉なれば、此の馬をも祕藏の餘りに、大夫黒と名付け給ふ。(一〇五)一の谷をも此の馬にて落されしが、八嶋にて繼信討たれし時、僧を請じ此の馬を牽ひかれしと云へり。

(屋嶋合戦)

元暦二年二月十六日、義經八嶋へ首途の時、大藏卿泰經朝臣、彼の亭に至り給ひ宣ひけるは、吾が家にあらざれば勇士の道知らずと雖も、推量の及ぶ處、大將たるべき人の匹夫の如く輕々しく一陣に進み給ふ事然るべからざるか。次將に譲りて其の身は退きて謀計はかりごとを廻らし凶徒を誅伐し給ふべしと宣ひたるに、義經の云はく、仰せの通り承り候へども、戰場に向ふの時は、我人一陣に進まん事を兼ねては思ふと雖も、其の期に至つては退き易き物にて候。然る時は將の勢に依つて軍兵其の意後れ候。某に於ては命を塵介よりも輕くし、逆徒を一時に責め平らけんと而已存のみずるより外、他事なく候と宣ひけるとぞ。其れより四國へ打立ち給ふと云へり。

摩利支天十七箇の印明の内、習ひ有り。後白河院義經傳へさせ給ふとぞ。弱冠の時より東光房圓忍より此の印明の習ひを傳へ給ふ。八嶋の時、源氏の軍兵を大勢と平家の方へ見なしたる事、義經其の印明の法をなし給ふしと密教の方にて云へり。

八嶋の軍の時、大臣殿宣ひしは、源氏は無勢なるに、何者の大勢と見なして周章しく舟に乗りたるゆゑ、念なう内裏をも燼かせたる事の口惜しさよと宣ひしに、御前に門脇殿居給ひしが、源九郎は猛心男と承り候。敵の箭伏間を作つて待ち掛け候にも怖れずとこそ申し候へ。精兵に貼はせ候はば、射取る事もや候はんと宣ひし程に、源九郎を見知りたる者や有ると尋ね給ふに、越中次郎兵衛盛繼申しけるは、九郎は色白き向齒の少し指出でたる、しるかんの男と沙汰承り候と申したるに、飛驒三郎左衛門景經申しけるは、周防國の住人、岩國三郎兼末、近き頃まで京家に候ひし程に、見知りたるにてこそ候はんと申す。則ち召されて御尋ね有りければ、兼末申すやう、某去年攝政殿に候時、義經參候す。某配膳仕りて能く見知り候。見懸二十計りに見えて、色白く貌形面長にして上髭もなく、一向の小冠者にて候。京童部は源九郎は空見する事癖なりと申す。其の如く折々上の方を見擧げ候目付する事癖にて候。向齒の事は人違ひにても候はんか。近江國の源氏山本九郎義經が向齒の些し指出でたり。左兵衛尉に成りし時、そり齒の兵衛と京童部の申し習はし候なれば、同名ゆゑ左馬の九郎と申しなしたるにや。口釋などは誠に爽かにて、木曾などとは事變つて殊の外京馴れて見え候と申したるに、如何して討ち取るべき謀もやと宣ひしに、義經は好色にて女を思ひ候由を兼末申したるにより、さらば計らひて射取れと宣ひたるに依つて、其の日の晩景に玉蟲と云ふ傾城を舩に乘せて舩に扇を立て、伊豫國の住人新居紀四郎親清は精兵の手達者なればとて、岩國三郎兼末諸共に玉蟲が舟に乘せて、源氏の方へ向ひけれども、源氏の方にも心得て、義經も見えず。扇は那須與一宗高が射落

したりければ、其れを感じて、阿波國の助當次(一〇八)の舟の幅はたに立ち顯はれて舞ひたりけるに、頸の骨を射抜(かれ)て倒れ死ににけり。惡七兵衛景清が義經なればとて怖るべきに非らず、手捕りにして海へ沈めんと荒言云ひて陸へ舉ありたれども、水尾屋十郎が兜かぶとの鞆たもとを曳き切りたる計りにて仕出(だし)たる事もなかりし。鞆を曳き切らんよりは持ちたる薙刀にて水尾屋が空臚からな薙いで討ち取りたらんには助當が報いにもなりなんと云ひあへりとぞ。新居紀四郎は壇の浦にて痛手負うて本國伊豫國へ落ち下りしに、河野と一族なれば、河野通信、同通經に此の事を語りしとにや。通經は義經の烏帽子子、軍法の弟子也。參會の時、通經、義經に語りしとぞ。

長谷川本に、續源五盛安(一〇九)、天性雙六の數寄にて院中へも召されてうちける程に、若き人々、双六源五と宣ひし。或時松殿に(一一)て、近江の山本兵衛尉義經(一二)と雙六をうちたりけり。

其の折柄しも丹波國より參らせたりしうち栗御前に有りしに、勝ちたらん方に賜はりなんと仰せられけるゆゑ、三番一徳の雙六あり。盛安は雙六の上手にて有りけれども、賽さいの目出でずして義經勝ちたり。其のうち栗を山本が方へ遣はされしに、如何なる人の書ききたるにや、うち栗の入れ物の下に狂歌を書き付けたり。

双六の源五が賽のうち栗を反齒さかの兵衛かち栗にする

山本兵衛義經が向齒の指出でたるを同名なれば大夫判官義經と云ひ誤りたるにやと云へり。

(壇浦合戦・義經景時不和)

壇浦にて平家の人々入水の時、能登守教經、義經を目懸けて義經の舟に乗り移り給ふの由云へり。

(一一三) 東鑑に、教經の頸一谷の時遠江守義定の手へ討ち取ると見えたり。或は飛驒三郎左衛門、

遠けれども

義經を目掛け、其の船に乗移る。義經味方の舟の間速きに輕々と飛び乗り給ふゆゑ、景經輕業ならず、又伊勢三郎が舟に乗りて討死したる沙汰あり。

(一一五)

元暦二年三月廿四日、既に没落せしかば、義經源八廣綱を以て京都へ奏せらる。合戦の次第具さに廣綱に御尋ねあり。御感の餘り、廣綱をば左兵衛尉になさる。則ち院よりも大夫尉信盛を勅使として、義經の許へ遣はされ、仰せらるるは、此の度平家の逆徒を悉く征討して、既に武威を顯はすの條、甚だ感じ思召す處なり。又賢所、神璽以下の御寶物無異に花洛に入れ奉るべき由仰せ下さるるとにや。同四月廿一日、梶原平三景時一族、平内景員をして、鎌倉へ書狀を獻ず。初には西國の合戦の時奇瑞の品々を記し、奥に至つて義經の事を支へ申す。其の詞に云はく、

(一二六)

西海の御合戦の内、吉瑞是多し。御平安の事は兼ねて神明の示す祥也。所以者如何なれば、先づ三月廿日景時が郎從海太の成光が夢想に、淨衣着たる男の立文を捧げて來たる有り。是石清水の(御使と)覺えて、彼の御文を拜見するの處に、平家未の日没すべしの由載せられたり。夢覺めて後、成光相語るに依つて、未の日は構へて勝負を決すべきの由存じ思ふ處に、果して告げの如し。又八嶋敗北の時も、味方の軍士幾ばくならず、然るに數萬の勢幻に

出現し、敵人の方へ見えしと云へり。次に去々年長門國の合戰の時、大龜一つ出で來たり、始は海上に浮み、後には陸へ上るに、泉郎是を怪しみ、三河守殿の御前に持參す。六人が力を以て猶持て煩ふ程也。時に其の甲を放つべしの由相議するの所、是より前、夢の告げ有り。彼の事を思ひ合はせて、三河守殿制禁を加へ給ひ、剩へ簡を付けて放ち遣はさる。平家没落の期に臨みて、彼の龜再び源氏の御船の前に浮み出でたり。簡を以て知れり。同時に白鳩二羽舟の屋形の上に飄へり舞ふ。其の時に當つて平家宗徒の人々海底に没す。又周防國の合戰の時も、白旗一流中虚に出現して暫く味方の軍士の眼前に見え、終に雲の膚に收まり畢んぬ。

又曰はく、判官殿君の代官として御家人等を副へ遣はされ、合戰を遂げ訖んぬ。然るに頻りに一身の功の由存ぜらるると雖も、偏に多勢（ゆゑなり）。人毎に判官殿を思はず、志君を仰ぎ奉るゆる同心の勲功を勵まし畢んぬ。依つて平家を討滅の後、判官殿の分野、日來に超過せり。士率の所存皆薄氷を踏むが如し。敢へて眞實和順の志なく、就中景時御所の近士として慙に嚴命の趣を伺ひ知るの間、毎に彼の非據を見て、關東の御氣色に違ふ歟の由諫め申す處に、諷詞還つて身の仇となり、動もすれば刑を招くもの也。合戰無異の命、伺候據る所なし。早く御免を蒙り歸參せんと欲す。

と書きたり。頼朝公此の狀を御覽有りて、九郎は嗚呼の者哉。終には頼朝をも敷皮にせんずると思ふにぞ有る覽。雅意を舉動ふなれば、景時に限らず、物毎に付きて諸士共の恨み思はんず



れと宣ひける。御前に因幡前司廣元、大夫屬入道善信、筑後權頭俊兼など候ひしが、以ての外の御氣色なれば、何共御挨拶も無かりしとぞ。是は去月廿四日壇浦の合戦の時、景時先陣を望みけれども、去る二月攝津國渡邊にて逆櫓の遺恨より義經心解けずして、許容し給はず。其れを景時腹立し、向ふ様に猪武者など云ふ而已に非らず、侍の主には成り難しなど嘲哂したりける程に、義經も大きに嗔恚給ひたるも理なりと云へり。其れよりして景時を惡き奴僕哉と思ひ給ふ。又義經の家人忠信を始め、侍の主にならぬ人ぞと云ひたる梶原めが口の程をためさんものと思ひ、龜井、鷲尾、片岡などは、年若き伎倆者なれば、己何日ぞ、何日ぞはなどと表向きにも云ひしと也。殊に片岡（弘經が兄）二郎經春は佐竹義政が智なり。佐竹謀叛に經春同意の聞え有るに依つて、治承五年三月廿七日、賴朝公の命にて雜色を經春が領下總國へ遣はされしに、御使と稱して法に過ぎたるゆゑ、經春嗔つて彼の雜色を打擲す。是に因つて經春が世帯召し放たるべき歟の由評未だ究まらざりし處に、梶原景時、其の頃未だ新參なりしが、經春が事をば日頃平家に志厚きの由惡し様に申しなしたり。是は一年佐川の宿にて經春が小舎人と景時が郎等と口論を仕出だし、小舎人理運に仕課せたり。是に依つて常々經春弘經にも中能からず、別して弘經、其の髭男嗚呼がましきなど云ひ、壇浦にて口論の時も、弘經先に進みて景時を害すべき氣色見えたり。經春も景時を惡しと思ひ、賴朝公をも恨み奉り、義經に志を通じたり。終に文治元年十月二十八日經春が領地、三崎の庄を召し放たれて、其の跡千葉常胤に給はると云へり。

異本義經記上之卷畢。

異本義經記卷下

(義經鎌倉下向)

元暦二年四月廿四日、<sup>(一一一)</sup>内侍所、神璽御入洛、義經手勢三百餘騎にて供奉す。<sup>(一一二)</sup>前内府以下の生

捕、土肥二郎寛平、伊勢三郎義盛、其の外軍兵共、是を相圍みて六條室町の義經の館へ入れ参ら<sup>(一一三)</sup>す。

同五月義經、<sup>(一一四)</sup>宗盛公父子を相伴ひ、近日鎌倉へ下向有るべきと也。頼朝公、老中因幡前司廣

元、大夫屬入道善信、筑後守俊兼、民部少丞行政等を召して仰せられけるは、義經大臣殿父子を伴ひ頓<sup>(一一五)</sup>がての内に是へ下り着くの由、世を鎮めたる事、九郎一人が手柄の様に申しなし、頼朝が軍勢を指添へたる事は思はず、殊に院の御氣色能き儘に、人の嘲哂をも顧みず、平大納言時忠の智になりし事は如何にぞや。時忠卿の今の身にては、索<sup>(一一六)</sup>にも葛<sup>(一一七)</sup>にも取り付きたからん。

又小外記信泰が時忠に頼まれ使したる事は、義經が右筆なれば、如何にもして義經が氣に入るやうに思ふべし。其れを額諾<sup>(一一八)</sup>たりし事所謂<sup>(一一九)</sup>なし。義經と云ふ者、其の天性猛武男<sup>(一二〇)</sup>にて、加様に今言ふ事をもあの障子の彼方<sup>(一二一)</sup>へも來て聞きなん。又此の疊の下よりも出づべき程の者にて有る也。油斷は努々<sup>(一二二)</sup>すべからず。金洗澤に關を居ゑて、鎌倉中へ入らぬやうに計らひ給ひ候へ。九

郎が心こそ猛く共、頼朝が有らん程は如何に思ふ共叶ひ難からん。其の上義經が家人共、功を鼻に掛け、嗚呼がましき者共なれば、九郎が言はず共、家人共が勧めもやせんずると宣ひしとにや。是に依つて金洗澤に關を居ゑて、大臣殿父子を請取り、判官は腰越に置かれける。

俗語に云ふ、時忠の姫君義經に別れて後、播州姫路に住み給ひしと云へり。

義經、是は如何なる故にかかる事も有らん。景時が何と申す共、度々の功を頼朝思ひ給はんには、假令軍功の賞までの事はなくとも、一と先づ對面有つて、軍忠の褒美なり共有るべきものの、さはなく(し)て鎌倉中へ入れられざる事こそ遺恨なれと宣ひしに、御傍に龜井、片岡など若き者共候ひしが、何條梶原めが御前の能き儘讒言を申すに付けての事にて候なれば、御對面なきに究まりなば、鎌倉へ竊盜入りて、其の髻男、ひきずり頭に仕侍らはなど申したりしを、辨慶忠信等、兎角時節も有りなんものと申しけるとにや。判官も(今)爰にて何と思ふ共叶ひ難からんと思はれけん、一通の款狀を認め、伊勢三郎をして、廣元朝臣の方へ遣はされしとぞ。因幡守此の事を披露せられけれども、兎角の御返事もなくて、使者に來たりし義盛と云ふ男にも油斷し給ふな。西國にての分野、又此の度も道にて後藤新兵衛と確執したる事皆以て奢りより出でたる事なれば、其の男も内心には邪氣を思ふにや有るらんと宣ひけり。其の後も全く不忠存ぜざるの旨起請を以て龜井六郎を使者に遣はされけれども、御承引なかりしとにや。

鎌倉腰越村龍護山滿福寺、其の地昔義經の宿ありし所と云へり。爰にして義經の命に依つ

て辨慶款狀を書きしなり。

(一三〇)

同六月五日、賴朝公終に義經に御對面なくして、大臣殿父子を請取り京都へ歸り給ふ。近江國

(一三一)

篠原にて宗盛公を右馬允公長斬り奉り、子息右衛門督清宗は堀彌太郎景光斬りてけり。父子の頭を三條の西に渡され、西洞院鷹司の獄門の樗の木に掛けられたりとなり。

(土佐房被斬)

(一三二)

同九月鎌倉より梶原源大景季、義勝房成尋御使として上洛。義經の館へ參候す。備前守行家

(一三三)

を誅罰有るべきとの仰せなり。義經所勞の由にて對面なく、兩人を歸し給ふ。一兩日過ぎて景

季成尋又參候する所に、佐藤忠信、伊勢三郎、辨慶法師など出で向ひ、兩使を亭へ招ず。暫く有りて義經脇息に(より)かかり對顔有り。兩人仰せの趣を演ぶる時、脇息を退け頭を傾けて仰せを聞き給ひて申さるるは、行家の事各も存知の通り、六孫王の流なれば、義經直に向ひ

誅戮すべきなり。未だ快よからず、病氣養生を遂げ、本復次第に相向ふべしと宣へり。景季鎌

倉に歸り、御返事の通りを申し上げ、(後)伊豫守殿の爲軀、誠に憔悴したまひ、顔色青覺めて、

灸治の跡など多く候と申したりしに、父の景時御前に候ひしが、嘲笑ひて、人は一夜寝ねず、食事を留め、一向酒を飲めば顔色衰へり、又灸治は當座に紙を付けて成りなん。一兩日過ぎて參向する間には、如何様にも謀ひ易からん。景季癪にて計略られたるにぞ有りなんと申したる

とにや。是に因りて義經をも迫罰有るべきとて、北條時政、土肥實平、三浦義村、和田義盛、梶

原景時などを召して評定有りしに、景時進み出でて申しけるは、伊豫守殿の御事、軍勢を向けられんに於ては定めて六かしかるべし。何れにても然るべき勇士を密に指遣はされて謀りて夜討など然るべからんか。當時在鎌倉に候土佐房昌俊こそ、智謀ある者にて候。此の者を御登せ候はば然るべからんかの由申しけるに依つて、土佐房に討手を仰せ付けられしと云へり。是は去る頃北條義時の亭にて、梶原景季と昌俊聊か口論の事あり。其れよりして梶原父子と中能からず。故に景時、昌俊が事を申し出だしたり。義經に對したる時は必ず昌俊仕損ずべきと兼ねて景時思ひたるとにや。

或は曰はく、土佐房私に望み申し上りたるとも云へり。

時に昌俊下野國に置きたりし老母が事など御憐愍を蒙るべきの由申し上げたり。(則ち)下野國中泉の庄を賜ふの由仰せ有りと云へり。斯くて土佐房昌俊、同九月九日に鎌倉を立つてけり。相従ふ輩には舍弟三上彌六、錦織四郎、門眞三郎、相澤二郎等都合八十三騎、同十七日に京着す。義經此の事を聞給ひ、辨慶をして土佐房を召す處に、昌俊、熊野參詣の由偽り申すに依つて、全く討手には參らざる由の起請文を書かせて歸し給へり。土佐房直に義經の六條室町の館へ押寄せたり。水尾野十郎、昌俊に方人す。其の頃義經は磯の前司が娘、靜を思ひて室町の亭へ置かれけるが、土佐が心知れがたし。御要心有るべき由申すと雖も、義經敢へて用ひ給はず、更に要心の氣色もなかりけるとぞ。義經の近仕したりし十七八の禿童の有りけるを靜が計略にて、昌俊が宿所の邊を窺はせたりしに、時移れども歸らざりし程に、靜心元なく思ひ、

仕女を遣はしたりしに、仕女走り歸りて、禿童は昌俊が門前に斬り殺されて有り。門の内には馬武具ものぐの音して既に寄すべき風情にて候と申すに依つて、彼の女を又備前守行家の方へ走らせ、靜は義經の閨に入りて起し奉り、兵具ものぐ取り出だし着せ申し、弓胡錄やなくひを參らす。義經笑ひ給ひて、女心の周章あわただしさよと宣ふに、早敵は寄せてけり。其時の義經、御方おとは弓取の思ふべき人ぞと宣ひしとにや。其の夜は義經の家人多くは外に有りて幾ばくならず。漸く佐藤忠信、辨慶法師、伊勢三郎など門を開きて相戦ふ。暫く有りて殘る郎等も外より來たり集り、競きまひかかる。後よりは備前守行家引包ひつんで責めんとす。昌俊が軍兵亂れ立つて、舍弟三上を初め、残り些すくなに討たれたり。土佐房は東を指して落ちたりしが、龍華越にかかり、鞍馬の僧正が谿たにに至りて先途かたを失ひ、窟いほやの内へ蟄居かくるたりしを、鞍馬の寺僧是を索來さかし擲めて、伊豫守殿へ參らせたりしを、御前に召されて、命扶たすくるぞ。參りて鎌倉殿へ申せと宣ひければ、昌俊、居長高ゐながたかになり、是は口惜しき殿の仰せや候。命は一々ひとつひとつより鎌倉殿に參らせ置きて候。片時も速とく頭を召され候へと申したり。義經聞し召して、然らば其の場を遁れずして討死すべきに、争でか鞍馬までは延びたるぞ。昌俊、癡おろかなる御証や候。昌俊鎌倉へ歸らばこそ、都に竊盜しやくたう居て、終には君を討ち奉るべきものなれば、一旦命を遁れたる事、命を惜しむにては候ふまじと申したるとにや。寔に神妙なりと云へり。終に六條河原にて斬られたり。

(三六)

傳に曰く、義朝都を落ちさせ給ひし時に、龍華越の方へかかり給ひし事を思ひ出だして昌俊も其の道筋へ落ちけるか。

或は曰く、栗田口の邊、義經の人数指塞きたると聞きて、龍華越にかかりし時、山の上に人数十人計りの聲しけるにより、敵と心得、直に鞍馬へ落ちたり。僧正が谷にて勞れてや有りけん、眩暈先途見え、漸く窟の有りける處に、従ふ伴黨三人に手を曳かれて匍匐入りたり。其の夜長高き山伏鞍馬の坊々に來たりて、伊豫守殿へ敵對の者、僧正が谷に有り。出で合ひて搦め捕れと喚ばる。依つて寺中の若僧起り出でて相尋ぬ。其の隠れなく索し出され四人共に生捕られたり。昌俊常に強精の天性なりしが、痛く勞れて暗々と虜られたり。起請人の神罰かと世人云ひあへり。堀川通油小路の中間、六條南の方義經の昔堀川の御館の所と云ふ。

#### (義經都落)

(一三七)

同十月三日義經仙洞へ参りて申し上げらるるは、凶徒を掌の内に退け畢んぬ。頼朝其の報を存ぜず、適充て行ふ處の所領等を召し擧げ候而己ならず、義經をも誅すべき旨を籌策り候。此の上は義經も運を天に任せ申すべきか。然らば院宣を賜はつて、備前守行家相伴ひ、頼朝に敵對し、雌雄を決し申すべし。さなくば、行家義經院中に於て腹を切り死すべきの由申し上げたり。此の事如何有るべきと公卿僉議の處に、泰經朝臣申されけるは、義經が申す處誠にして、院中にて行家義經若し自殺するに於ては、後代までの珍事些ならず。其の上渠儀に同意の有綱義教有り。伊豫守に相従ふ處の家人、其の心金鐵の如くなる者共なれば、其の所爲計り

がたし。又さはなく共宇治勢田を指塞いで、鎌倉勢を引請くるならば、一定君を渠儂が館へ行幸なし奉るべきか。若し軍に利なくば、君を取り奉りて西國へ赴かん時、誰有りて取り留め奉るべきや。皆以て珍事遁がれかたき處か。一先づ院宣をなし下されての上、御僉議有りて源二位方へも仰せ遣はさるべし。事急なるに遅引に及びなば、義經邪氣を顯はす時は、悔ゆとも其の詮有るべからずと宣ひければ、諸卿一同に此の義尤もなりとて、則ち院宣を賜はりたると云ふ。

座主の事、第(五)十九世の座主、前權僧正全玄桂林房也。(一三八)山門東塔今の政所也。

山門記錄に、文治元年十一月自朔日、爲義經謀叛御祈、於東塔北台八部尾桂林房、修四天王法。同八日中結願畢て下京すと云。日中諸願有密門習是義經落西海之間、可奉執

法皇之由、披露天下。仍爲除其恐怖、被令修此法也。間イ然則無爲落避畢。可謂

法驗。同十二日被行勸賞。令權少僧都永辨、東北惠光房叙法印云。下略。

義經既に院宣を申し下し宿所に歸り、菊地二郎高直を召して、義經こそ院宣を賜はり、西國へ赴くべし。御邊は西國の案内なれば、此の度一向頼むの由宣ふ。高直承り、仰せ畏つて御供に罷り下るべく候へ共、子にて候八郎、當時在鎌倉に候程に、渠を呼びよせ候ひて一所に御跡より参り、御味方仕つて候はんと申したりけり。其の晩景、緒方三郎維義を召して、義(經院)宣を給はり、西國の方へ赴かんと思ふなりとて、彼の院宣を維義に見せ給ひて、御邊は猛勢の人なり。頼まれてたび給ふべきやと宣ひければ、維義、子細にや及び候べき。さりながら當時



御内に屬して候菊池二郎高直は、我等が家の怨敵にて候間、給はつて誅戮仕り度き由申す。

(義經)、いさよ、吾もさは存ずる。一定彼は鎌倉へ参るところ見えて候へ。今宵押寄せて搦

め捕るべきの由宣ひて、則ち佐藤忠信、源八兵衛廣綱七十餘騎にて、其の夜丑の越計りに菊

池が三條西洞院の家に押寄す。緒方が郎等、福永小藤太裏門よりも五十餘騎にて寄せたり。俄

かの事なれば菊池の郎等周章で騒ぐ中に、早門をも押壞られたり。高直は漸く腹巻計り着し、

太刀を抜き、廣庭に踊り出でて戦ひたれども、終に虜られぬ。郎等も思ひ思ひに討死し、或は

退散したるとにや。忠信廣綱が手の者少々疵を蒙むると云へり。菊池は終に七條河原にて誅せ

られたると也。緒方三郎は義經に頼まれ申し、一日先達つて本國へ下りたると云。同十月廿九

日、義經を責めんが爲、頼朝公御馬を出ださるべきに定まりたり。先陣は土肥二郎寛平、後陣

は千葉介常胤也。これにより義經既に西國に赴かんとす。前の夜先づ御臺所重頼息女妾靜に十郎權

頭兼房を相添へて、淀の江内忠俊が方が忍ばせて、同十一月朔日、伊勢三郎義盛を仙洞へ参ら

せ、大藏卿泰經朝臣を以て申し上げらるるは、頼朝義經を責めんが爲に上洛するの由、帝都に

於て待ち請け、雌雄を決せん事、且つは上への惶れを存じ、一先づ西國の方へ赴き候の由申し

上げらる。同三日義經都をひらき給ふ。先陣は備前守行家、紺地の錦の直垂に、櫻綴の鎧を

著、鹿毛の馬に沃掛地の鞍を置いて乗り、相従ふ郎等七十餘騎、其の次は前中將時實、侍従良

成、伊豆右衛門尉有綱、郎等五十餘騎相具す。曳降つて伊豫守義經、赤地の錦の直垂に萌黄織

の冑、同じ毛の四方白の兜に鉾形打つて、龍頭居るたるを著、金作りの太刀、虎の皮の尻鞆掛

けたるを佩<sup>は</sup>き、滋藤<sup>しとう</sup>の弓に大中黒<sup>ちゅうちゅうくろ</sup>の箭<sup>や</sup>を負ひ、黒の馬に紅<sup>こう</sup>の厚總<sup>こうそう</sup>掛けてうち駕<sup>か</sup>り、手の郎等三  
 百餘騎<sup>ひやくじよき</sup>彼是都合五百餘騎と云へり。京中の老若男女、其の道筋に出でて、其の跡を慕<sup>も</sup>へり。義  
 經殊<sup>こと</sup>に其の粧<sup>つらば</sup>ひ美しくして、所々にて馬を控<sup>ひか</sup>へ、或は會釋<sup>かいしやく</sup>し、又は詞をかけ給ふ。都守護の内  
 は私なく、さしも良將たりし人の、人の譏<sup>さかしら</sup>ゆるに、帝都をひらき給ふ事の惜しきよと人皆云ひ  
 合<sup>あ</sup>へり。其の日は淀<sup>ふみ</sup>の忠俊<sup>ちゆうしゆん</sup>が許に宿<sup>しゆく</sup>し給ふ。<sup>(四三)</sup>同五日攝津國川尻<sup>せつしん</sup>に着<sup>き</sup>き給ふ處に、多田藏人行  
 綱<sup>てしな</sup>、豐鳴冠<sup>てしな</sup>者高頼<sup>たかより</sup>、手勢百騎計りにて馳<sup>か</sup>せ向ふ。義經點頭<sup>ぎけいとうち</sup>笑ひ、渠<sup>かれ</sup>同じ流<sup>りゆう</sup>の者なれども、成親  
 卿の謀叛<sup>ぼうはん</sup>に同意して、清盛法師に魔<sup>まど</sup>されて白狀<sup>はくじやう</sup>したる不覺人ぞ。弓箭<sup>きうせん</sup>まではいるまじ。只蹴<sup>け</sup>散<sup>さん</sup>  
 して通れとて、義經の三百餘騎<sup>ひやくじよき</sup>兜<sup>かぶと</sup>を傾<sup>かた</sup>むけ喚<sup>おほ</sup>いてかかれば、行綱高頼<sup>ぎやうきやうたかより</sup>一<sup>いっ</sup>支<sup>し</sup>へも支<sup>さ</sup>へずして、四  
 角八方へ分散す。今は何事か有らんとて、大物浦より舟に乗り給ふ處に、逆風頻りに浪を轉倒<sup>くわんたう</sup>  
 して、相伴<sup>さへん</sup>ふ人々の舟も皆散々になりて先途<sup>ゆまかた</sup>知れず、<sup>(四五)</sup>義經の舟には、駕<sup>か</sup>の伊豆右衛門尉有綱、  
 武藏房辨慶、片岡八郎弘經、堀彌太郎景光、靜女、小舎人、下部、漸<sup>ゆ</sup>う二十人には過ぎざり  
 き。これに依りて又舟を大物の浦へ漕<sup>こ</sup>ぎ戻<sup>もど</sup>して、天王寺に暫く休息し給ふ。御臺所の舟には十  
 郎權頭、伊勢三郎付き従ひて、兵庫へ着岸すと云へり。兼ねて相圖<sup>さうず</sup>や有りけん、同八月大和路  
 に赴<sup>おもむ</sup>き給ひし時は、相從<sup>さうじゆ</sup>ふ者共何れも集りしとなり。<sup>(四六)</sup>越前國の住人、齊藤庄四郎と云ふ者有  
 り。御室の御所にて男になり、平經正に屬し、平家<sup>(都を)</sup>没落の時、京に滞り、木曾に従  
 ひ、義仲討たれて後、義經の家人となる。義經都守護の時、郎從共會合して物語の時、庄が云  
 ふ様、三位中將重衡卿の乳母、後藤兵衛盛長が髭<sup>ひげ</sup>程見事なる髭は有るまじ。今は姿をも隠しな

んに、髭有りては人も見知るべきなれば、髭を剃り落したらん、可惜おた髭なるの由雜談したり。義經是を傳へ聞き給ひて、庄は髭すき數寄すきなるか、盛長が髭持たず共、三位中將を我が馬に駕かせて、我は跡に滞りとま討死したりせば、髭はなく共見事にて有らん物を。吾は天性上髭もなければ、庄が主に取つても本意なかるらんと笑ひたるとにや。後、庄四郎は義經の許をも浪人したり。去る十一月三日、都落の時、義經川尻の舟支度したるが、見て参れとて、大夫判官友實を遣はされける。友實則ち川尻に赴く道にて、庄四郎に行き逢ひ、庄、友實に云ふ様、伊豫守殿は鎌倉殿と御中不和にならせ給ひて、都をひらき給ふの由風聞あり。一度主君に頼み奉りし上は、御先途をも見届け申し度き由を云へり。友實其の詞を誠と思ひて、伊豫守殿へ其の通りを達すべき由を云ひて、相伴ひ行くの處に、道にて思案して、庄が心計りがたしと思ひけん、則ち庄を指殺したりと云云。

平家物語に重衡生捕の處に、庄四郎高家とあり。此れ庄四郎が事歟。

(靜鎌倉下向)

文治元年十一月十七日、(二四八)義經吉野の山へ入り給ふ時に、靜を召され仰せられしは、山上は女人結界の地也。御身は是よりも都へ歸り給へ。重ねて迎ひを上のぼすべき由を宣のたまひしに、靜は只一向に御名殘を而已のみ惜しみ奉りけれども叶はずして、靜に金銀並びに丸盡ぐづみしの小鼓づみを賜はり、雜色下部を付けて都へ歸されしに、彼の雜色下部靜に賜はる處の金銀を奪ひ取り、靜を捨てて逐

電す。靜は藤尾坂の邊を惑ひ歩き、漸々と藏王堂に至る時に、衆徒是を怪しめ尤むるの處、  
 隠すに詞なうして、終に靜なるよし申す。これに依つて執行の房へ誘引ひ入れて、京都へ此の  
 由を訴ふ。北條時政是を召して、義經の在隱家を尋ね給ふに、靜申して云はく、去る六日大物  
 の浦にて舟に召し給ふ處に、難風に逢ひ、舟共散々になりて、伊豫守殿に順ふ處の者僅にし  
 て、其れよりも大和路にかかり、吉野の山に入り給ふ時、山上は女人結果たるゆゑ、自ら供す  
 る事も叶はず、道より都へ歸し給ふ處に、付き上せ給ふ雑色下部賜はる所の物を盗み取り、吾  
 を藤尾坂に捨てて逐電す。是より後の事は知らざる由申し切る。これに依つて頼朝公直に御尋  
 有るべしとて、同二年三月朔日靜並びに母の磯の前司共に鎌倉へ召され、足立新三郎清經に預  
 け置かれ、時々義經の有所を御尋ね有りけれども、曾つて存ぜざるの由申し切ると也。其の頃  
 義經の子を懐胎す。兼ねて女子ならば靜に賜はるべし。男子ならば遁るまじきの由仰せの處、  
 果して男子を産めり。清經に仰せて害せらると云へり。御臺所月頃靜が藝堪能の由聞召し及ば  
 せ給ひて、(此の事を)御所望有り。靜辭し申すといへども、一向仰せらるるに依つて、同四  
 月八日若宮の實前にて藝を施す。畠山重忠、工藤祐經、其の役に出づ。靜先づ和歌を擧げて、  
 (五二)

吉野山峰の白雪踏み分けて入りにし人の跡ぞ戀しき

賤や賤しづの小手巻繰り返し昔を今になすよしもがな

頼朝公、此の和歌の心を聞召し、仰せらるるは、初發先づ當家を祝するの言有べき處に、さは  
 なくして逆徒義經を慕ふ事奇怪なりと宣ひしに、御臺所の仰せらるるは、君土肥の相山の戦場

の時、自らが心を以て比ぶるに、靜が所存尤も也と宣ひしとにや。御臺所姫君よりも御憐愍有りしと也。

(梶原景茂靜無禮)

(一五三)

同五月十四日、工藤左衛門尉祐經、梶原三郎景茂、千葉平次常秀、八田太郎知重、藤判官代邦通など、足立清經が所に至り酒宴をなす。磯の前司、時勢をかなづ。時に梶原景茂靜に戯る。靜が云はく、尾籠なり。吾不肖の身なれども、伊豫守殿の妾なり。伊豫守殿は鎌倉殿の御連枝、汝が爲には主君ならずや。我が君恙なく渡らせ給はば、吾汝に逢ふべきや。汝が親の景時、逆櫓とやらん、臆病を云ひ出し、其の事を隠さんが爲に、我が君を讒し奉りし事、世人普く知る處也。今又汝かかる不禮の舉動、人の作す業に非らず。吾汝を謀り寄つて主君の仇を報ぜんこと最易けれども、同座に母あり。後の報いを思ふ女心の口惜しさよと落涙す。景茂頗る面を赤め、詞なし。座中興醒めたる所に、邦道座を立つて、双方を宥め、漸々として皆々退出す。此の沙汰鎌倉中に隠れなく人口取々也。御臺所聞召され、大きに是を感じ給ひ、尤も侍の思ふべき女なりと宣ふ。靜御暇を給はり、都へ上る時も、御臺所姫君より色々の珍物を賜ふとにや。

(一五五)

或は曰はく、義經奥州にて自害の由を聞きて、靜尼になりて、名をば再性と付けて、暫く嵯峨の邊に有りしが、後南都に住みしと也。又奥州の方へ下りし共云へり。傳に曰はく、

少納言道憲入道、信西は、時勢<sup>いまだう</sup>、舞の上手にて面白き舞の手を選び出し、磯の前司に教へて舞はせたり。靜其の藝を習ひたるに、母よりも勝れたり。殊に容貌<sup>みやびやう</sup>婉妹<sup>みづか</sup>にして、心緒<sup>こころ</sup>優なりとにや。元暦元年六月始めて義經に奉公す。前司は阿波國磯と云ふ所の者なる故、磯の前司と云へり。今は其の所を磯崎と云ふ。靜は淡路の志津賀と云ふ所にて出生したるゆゑに名とす。今は所の者誤りて志津木と云へり。

又丹後海陸巡遊日錄に、有村、又云磯、昔日白拍子磯禪師及靜御前所出也。靜塔在于此と云ふと有り。

(義經多武峯入)

文治元年十一月下旬、義經山伏の姿となりて、大和國多武峯十字房に入り給ふ。藤室<sup>ふぢむろ</sup>などとはを賞翫<sup>しょうくわん</sup>すと也。<sup>(一五八)</sup>十字坊申すやう、當山は土地狹<sup>ま</sup>くして、又寺院幾ばくならず、京都より若し責め來たらん時、防ぐに便り有るべからず。是より戸津川の邊は人馬不通に、要害の所也。是へ送り奉らんとて、則ち道德、行徳、拾悟、(拾)禪、樂圓、樂達、文妙、文實、此の八人を付け參らせ、戸津川へ送り奉る。これに依つて京都より多武峯の寺々を悉<sup>さ</sup>く索<sup>さ</sup>し求むると雖も、其の實なし。十字坊、藤室等逐電<sup>しゆでん</sup>すと云<sup>い</sup>ふ。

或は曰はく、多武峯に入り給ふ時、先づ南都勸修坊に暫く忍び給ふと也。又曰はく、吉野を落ち給ひて、其れより南都に出で給ひ、勸修坊の室に居給ひしとも云へり。此の寺に義

經の具足あり。胴、小札緋緘、腹は承平皮、絃走、大袖、障子の板、頸障の板、逆板、腕立、草摺、四行大きなり。何れも黄金の彫物なり。又春日の御寶殿に兜あり。内に銘あり。椎形なり。四方白、黄金の焼付の鍔形、何れも彫物鮮かにして、寔に結構なり。尋常の人の鎧甲に非らず。又吉野吉水院にも義經の具足とてあり。承平皮にて前を包む。同じく太刀もあり。

(禪林房覺日札問)

文治二年五月下浣の頃、義經鞍馬東光房に忍びて御坐す由、其の上禪林房を始め、義經に同意するの風聞あり。これに依つて六月三日梶原刑部丞百餘騎にて鞍馬を索すと雖も、其の誠なき事にて、殊更東光房圓忍も去年の秋の頃より病痾に犯され、老身心ならず。故に禪林房學日記り相伴ひ、北條殿に参向す。時政直に子細を尋ね給ふ處に、學日申して曰はく、豫州幼稚の時より師弟の昵深かりしゆゑ、都をひらき給ふ事露計りも存じ候はば、争でか見放し申すべきや。努々知らせ給はず。但し師にて候圓忍、其の頃は所勞以ての外なりしゆゑ、晝夜心を盡し候ひき。又豫州も是存の事ゆゑ、態と知らせ給はざる敷。近頃殘念とや申さん。又恨みとや申すべきと申す。北條殿聞き給ひて、和僧は豫州に同意の結構の由、其の有所知り給ふべきなれば、眞直に宣ふべし。然らずば有の儘申さるるまで責め問ふべき由を宣ふ時に、學日、豫州とは師弟の馴染み深く、寔に父子の契りの如くなりしものを。争でか疎略に致すべきや。行方のは

事仰せまでもなく存じ候はば、野僧は師の病に暇なく共、親しき者なり共機關ひて、其の先途をも見届け申すべきに、知らざる事の本意なく候。假令出家の身なり共、かかる事は俗にも違ふべきにあらざれば、御心に任せ、其の罪に行ひ給ふべしと申し切るとにや。時に友景申して云はく、禪林房は伊豫殿の行方を知らざると申す儀心得がたく候。土佐房昌俊を擲めて参らせたるも、禪林房の計らひとこそ人も申したりしぞかし。其の頃より謀叛同意なれば、兼ねての約諾も有りなん。糺問に及ばざる前に、包まず申し給へと云ひたり。學日嘲笑ひて、御邊が思ふ所とは相違すべし。昌俊が事は、豫州其の頃は都の守護なり。鎌倉殿加様に惡み給ふ事分明ならず。殊更鞍馬は馴染みの所なるゆゑ、昌俊私の宿意を以て伊豫守殿に敵對して逃げ來たるならんと、寺中普く存ずる處なれば、擲め捕つて参らせたり。御邊の兄の景時腹黒にて、加様に御連枝の間を逆けたりし事、世の人知る處也。其の讒言を御用ひある鎌倉殿の御所存こそ口惜しく候へ。とても御亡び有るべきならば、さしも日本國に其の功の顯はれたる御舍弟なれば、又はさりぬべき人こそ仰せ有るべき事なるに、彼の昌俊法師は正しき故左馬頭殿の小舎人童にて候ひき。大和般若寺にて法師になり、二階堂に居たりしぞかし。御當代になりて、領地賜はりたれ共、其の身小身の輩なれば、假令鎌倉殿思召す事有り共、渠軀の者を御舍弟の討手とは仰せらるまじきと思ひたるは僻言か。所詮和殿が所存とは違ふべし。假令糺問に及ぶとも、知らざる事は云ふまじ。増して其の先途存ぜねば、勿論なりとて、一寸も騒ぎたる氣色はなかりしとにや。北條殿も如何思はれけん、暫く休息有るべき由にて、警固の侍を付けて置か



れたりしが、夜に入りて禪林房を近く招き、暫くの内問答有りしが、義經の行方知らざるに治定したり。翌四日早朝勢州より飛脚到來、神祇權大副公宣が方より注進あり。去る頃(一六〇)義經伊勢國を廻り、大神宮へ詣うで、其れより南都に赴く。祭主能隆、義經に内通有る由告げ來たる。これに因つて禪林房は有めて歸されしと云へり。

(常盤糺問)

同六月六日一條河崎觀音堂の門前にて、義經の母堂常盤(二六一)を尋ね出す。娘長成朝臣を相具す。

左馬頭能保朝臣の館たちに入れ、能保直ぢまに對面有りて、義經の事を尋ね給ふに、常盤宣ひけるは、去年十一月朔日の夜、豫州侍從良成相共に來たり給ひて、鎌倉殿景時が讒言を用ひ、義經を亡ぼさんとし給ふ。一先づ西國の方へ赴き身の科とがなきの由を申し啓ひらかんが程、何方いづに成りとも暫く忍びて有るべきの由宣ふに、自らが申すは、西國へひらき給ふとも、誰有つて鎌倉殿へ其の眞まことを申し啓ひらかんや。讒者は日々に壯さかんに成りて、渠かれ儂が爲に亡ぼされんよりは、早く軍兵を集め、都の内にて鎌倉勢を引請け、雌雄を決し給はざらんやと申したれども、讒者の爲よがに咎なき都の者を惱なやまし、剩あまつさへ上の御心をも苦しめ奉る事本意に非らず、我一人西國へ赴き、過よがなきの由謝し申し、叶はざらん時は運に任するにてこそ候はんとて歸り給ひて後、其の先途を知らずと申し切り給ふとにや。左馬頭も憐愍し給ふと也。殊に能保朝臣の室家、去る平治の時、父義朝に放れて、後藤兵衛實基夫婦計りを力にて、餘りに便たよりなく有りし事、今思ひ合はせ給ふ由宣

ひて、最<sup>いと</sup>懇<sup>けんごう</sup>にし給ひしと云へり。常盤息女を能保の室家の計らひにて、後に美濃國の住人玄蕃藏人仲綱に娶<sup>めあ</sup>はせ給ひしとなり。

或は曰はく、常盤阿野法橋全成の方に居給ひしが、後には美濃國に居住と云へり。山中村に常盤の墳墓の由にて一塚今にあり。仕女の墓とて其の傍にあり。所の者の云へるは、常盤義經の跡を慕ひ奥州に赴き給ふの時、此の所にして夜盜の爲に害せらるると云<sup>云</sup>。不審<sup>いふかし</sup>。

阿野全成、建仁二年六月廿三日、謀叛に依りて常陸國へ配流、其の所にて誅せらる。息男頼全も同七月六日洛の東山延年寺にて討たるとなり。

(守覺法親王述懷)

(一六二)

同六月廿二日義經御室の邊に忍びて居給ふ由風聞有るに依りて、後藤新兵衛尉基清、梶原刑部丞友景五百餘騎にて、御室の邊を尋ぬると雖も、虚説にて兩人空しく歸洛す。其の時節<sup>ときふし</sup>左京大夫大江匡範、仁和寺の御所へ伺候して御前に候ひしに、守覺法親王仰せられしは、景時が讒を

(一六三)

源二位が用ひて、伊豫守を誅せんとして、加様に都鄙を騒がす事ぞや。吾をも義經と同意なる由、源二位があやぶみ思ふの由、我弓箭を取る身ならねば、何を以て伊豫守が我を頼まんや。天下安全の祈りは其の業なれば懈<sup>よそに</sup>らず。是は義經が爲に非らず。天下の御爲、頼朝が爲にても有るぞかし。其れを同意なると云ひて、基清友景が鎌倉を嵩<sup>かさ</sup>にきて、法に過ぎたる舉動<sup>きどう</sup>するぞかし。最<sup>ひき</sup>負<sup>ひき</sup>にて云ふにあらねど、義經が都の守護の時は、かかる無禮はなかりしぞと仰せら

れしに、匡範承り、是は偏に景時が計らひにてこそ候はめ。友景と申し、基清と申し、皆以て景時が同類にて候。其れを源二位知らぬ由にて計らひ候事、所存有つての故にてもや候はん。兎角伊豫守武功過ぎたるゆゑと存じ候。今義經に比ぶる人なきとこそ世の人も申し候ひき。某が元の宅地は一條油小路にて、義經繼父大藏卿長成朝臣の近隣にて、牛若丸の時より能く存じ候に、少人の頃より唯者にてはなきとこそ人も申し候ひき。父義朝討たれて後、鞍馬に登り、學文を勤め候にも、甚だ器用にて、東光坊も禪林房も歡び思ひ候處に、何の頃よりか學問は捨りて只太刀打、飛越、跳越などを事とし、其の業外に人なきやうに見えて、寺中にては牛若は僧正が谿にて、天狗に兵法を習ひ給ふと云ひあへり。夜に入れば、暗ともいはず貴船へ詣り候ゆゑ、師の坊、寺中の僧など跡をしたひて行くに、其の仕業は見えざりけれ共、僧正が谷の邊にて、人の大勢集りし音など聞えたるゆゑ、師の坊も寺中の僧も魂を消したると沙汰申したりし。十六の年の春、奥州へ下る道にて、夜盜を討ち、又深栖重頼が方にて馬盜人を搦め捕りたし形勢、十六歳の小腕の業、凡夫の及ぶ處に非らずと人も申し候ひき。秀衡が許に中一年滯留して十八年の年の春、又洛に上り、堀川の法眼が申し殘したる所も思慮有りしに、法眼軍書を惜しみて見せざりしゆゑ、義經謀つて法眼が娘に通じ、祕書を女に盗み出させ、寫し取りし程に、鬼一と中違ひて渠儂が方を立ち退きたれ共、女も懷妊したる程に、東光房の取持にて中直りして、終に軍法の奥義を納得して、強敵共事故なく討ち平げ、一度も不覺を取らざるを見ては、賴朝浮世に有らん程こそ何事も有るまじけれ共、子孫の代には千里の野に虎を放ち置きた

るやう（に）頼朝も存すべきか。又義經も會間あまひ能くばと存するにてもやとぞ申したるとにや。

此の度兩使火急あわただしくイに御室の邊さかを索さがしたる事は、義經都の守護の時、折々御室へも召されて參上有

つて、宮も御心安き御氣色にてぞ有りける。或時、守覺法親王御所勞の頃、大學あつちか佐敦周、賀茂

神主重政兩人、御伽の爲伺候申したりしに、宮仰せらるるは、兩人は如何いか有らん。義經が顔おもて白

は但馬守經正にあれ程能く似たる者はあらじ。聲音こゑまで似たると仰せ有りしを、敦周承り、誠

に聲根こゑつき、吻くちも、色の白さ、經正に能くも似てこそと申されしに、重政、御所様には經正重形の時

より御志有つて御不便に思召され侍りし程に、其れに似たる義經なれば、御最負ひいきに思召さるる

も御理にやと申しけるを、敦周、いやとよ、伊豫守は艶男やまなれば、見かけより人の思ひ付きの

由京童部も申し候ひき。此の人弱冠の時、鞍馬に登せて、法師になせと平相國の指圖ゆゑ、彼

の山へ上りたれども、窈窕みづひやかなる兒なれば、師匠の禪林房も法師になす事を惜しみ、其の身も嫌

ひけるを幸ひにして、兎角得度を延ばしたると承り候へ。其れ而已のみならず家人たりし辨慶法

師、片岡八郎なども、義經弱冠の時、愛色の心有つて従ひ屬きたるとの沙汰は有れ共、其れは

未だ兒の時の事、今は男にして、しかも源氏の大將軍なるに、美弱過ぎて大將めかず、義經よ

り經正は器量きりやう健たけにて見かけも天晴あつぱれ大將と云ひつべきか。御所様には一切御志深かりし經正に顔

ばせ、聲音こゑまで能く似たる義經なれば、強あがちに御最負ひいきにてもやと申したりければ、宮聞食し

て、惣すべて人には愛敬有るとなきと有るものなれば、經正に似たる計りにてもなく、義經は吾

に愛敬あるにや、一切強敵共を事故ことなく討ち平げ、日本の神寶を華洛へ入れ奉りし事、義經一

人の武功に有り。其れを居ながら計らひたるばかりの頼朝が功なれば、關東は頼朝が國務して、關西は一圓に義經國務を賜はる筈にてこそあらめ。其れを頼朝一人思ふ儘の武家の惣將白こそ心得ねと仰せられければ、兩人承り、誰々も左こそ存じ候へ。其の心辨へざる京重部共も、義經ならではなど口々に申す由、其れを源二位傳へ承り、興醒め白したるところ承り候へ。其れに付けて彼の景時が思ふ儘に義經が事を有る事もあらぬ事も支へ申すの由、人も申し候へ。景時が弟友實が折々京上りしたるも、義經の形勢をしらんが爲の由申し候。其れに又後藤新兵衛基清は、左馬頭能保朝臣の簾中の所縁にて在京したり。友實は基清が妻の伯母舅なれば、梶原と一味にして、是も義經の分野に目を付くるなりと人も囁き候へと申したりければ、宮打笑はせ給ひて、基清が目つきにて目付するならば、何事か見出さ(さ)らんと仰せられしに、敦周、あれは團栗眼と申し候。元暦二年に兵衛尉になりたる時も、京重部、鼠兵衛と名を付け候ひき。鼠の眼に似たると申す事にや。友實も同時に刑部丞に成りしに、聲湍濁れて、咲笑しき男形にて候。一年城の越後守資長が平家に屬して、木曾を襲はんが爲に出陣せし時、虚空より湍濁れたる聲にて、平家の方人する者あり、搦め捕れやと呼びしと申す沙汰あるに依つて、京重部の友實が湍濁れたる聲を聞きて、妖怪刑部と申すなりと申しける。宮聞召され、基清が養父實基は至つて實目なる侍の由人も譽めたりけれ共、其の家を繼ぎたる基清は養父が十にして、其の一つもなきなんど人も云ふぞと仰せ有りしとぞ。其の頃宮の侍に、清の兵衛尉何某と云ふ者有り。基清が實父隨身仲清が所縁の者にて、常に基清と參會したり。御室の噂など物語せし序に、

しかゞの事有りし由を基清に語り（し）とぞ。此の事御室へ聞えて、清。兵衛浪人したりし程に、若し此の兵衛が云ひ出だして御室を索したるにやと云へり。

（二六六）

義經の郎等伊勢三郎に基清宿意を挿む事あり。是は去る元暦二年義經鎌倉へ下向の時、道にて義盛が馬を牽き立てたる處に、基清が下部其の馬の後を通る。彼の馬騷ねて基清が下部を踏む。残りの下部四五人奔り來たりて、義盛が馬の轡を切り放つ。義盛が舍人と既に鬭諍に及ぶ。義盛是を見て、弓を取つて鏃のなき箭にて鞆切つたる下部の太股を射る。下部泣き叫んで逃げ走る。基清是を聞きて、太刀を取つて義盛に向ふ。義盛も渠と勝負を決せんとす。左馬頭能保朝臣此の事を聞き給ひ、急ぎ馬を馳せ來たり給ひ、双方の中へ入りて制し有め給ふ。義經は遙の後陣なるゆゑ使者を遣はし告げ給ふ。義經に先達つて辨慶法師、佐藤忠信、馬に一鞭を進めて馳せ來、事を宥めて終に和平になる。其の後義經も來たり給ひ、基清に自今以後、遺恨有るまじきの由を宣ふ。又義盛をも制し給ふとなり。其の事を基清常に云ひ出だして腹立す。此の度序を以て其の仇を報ぜんとにやと、京童部共は云ひあへり。

（義經小舍人童五郎丸）

（二六七）

同七月四日左馬頭能保朝臣の家人、義經の小舍人童五郎丸を生捕る。能保の宅にして、義經の在家を尋ねらるるに、去る六月廿日まで叡山横川飯室谷、淨戒坊俊章阿闍梨の許に御坐す。仲教阿闍梨、承意律師等馳走あり。義經室家重頼息女當時懷妊の身也。右僧中、計らひにて東坂本

に居給ふの由。五郎丸は丹波の者也。母所勞の由にて暇給はり丹州に越え、昨日上京の由申す。これに因つて山門の貫主桂林房僧正全玄の方へ仰せ遣はさるる處に、豫州同意の僧徒行方知れずと也。俊章等義經を伴ひ奥州の方へ赴くの由巷説あり。

(堀彌太郎景光生捕)

義經在京の時、久我内大臣雅通公の姫君に通じ給ひしに、都をひらき給ふ時、鷹司の邊に居ゑ給ひし。此の姫君の方、又木工頭範季方へ、文治二年の秋、堀彌太郎景光義經の使に上京し、暫く範季が方に忍び居たり。九月廿二日、私用有りて猪熊の邊に至る途にて、糟谷藤太有季に行き逢ふ。日頃互に見知つたれば、有季が郎等下り重なりて虜る。景光笠を着ながら太刀を抜きたれども、大勢なれば念なう生捕(られ)たり。景光、木工頭範季、又雅通公の姫君の事を白狀す。是に依つて範季が事を能保朝臣鎌倉へ注進ありと云へり。

(佐藤忠信討死)

佐藤四郎兵衛忠信は、兼ねて中御門東洞院に密通の女あり。名を力壽と云へり。渠に餘波を惜し(まん)が爲に、九月廿二日、宇治より暫しの暇申して京に出て、夜に入つて女の方へ行きたりしに、彼の女忠信都をひらきし後は、糟谷藤太有季に機關ひし程に、忠信が來たりし事を密に有季が方へ告げたり。糟谷郎等五十騎計り具して、夜半の頃力壽が家を取圍む。忠信弓

を取つて箭を放つ。元來精兵なれば四五人矢前に殺されたり。忠信が郎等二人太刀を抜いて相戦ふ。糟谷が郎等多く討たれ、又は疵を蒙る。忠信が郎等も終に討たる。其の隙に忠信も腹切つて死すと云ふ。

繼信忠信は秀衡近親也。秀郷朝臣の後胤。信夫佐藤庄司基治が男也。治承四年義經平泉を出陣の時、秀衡此の兄弟を付け申せしとなり。佐藤庄司は泰衡退治の時、伊達郡石那坂にして常陸冠者爲宗、二郎爲重、三郎資綱、四郎爲家と戦ひ、基治が軍敗れて、基治、虜らるるといへども、勇敢の褒有るにより、文治五年十月二日厚免を蒙り、本領に安堵す。家督を繼信が子、左兵衛經信に繼がしむ。忠信が子は京七條坊門にあつて、坊門三郎經忠と云へり。忠信屋敷の跡、七條坊門にあり。今不動堂の東南の方也。此の所農民耕作をせずとなり。

(南都勸修坊得業聖佛)

(一七三)

文治三年三月南都勸修房得業聖佛召しに依つて、鎌倉へ参向す。結城七郎朝光に預けらる。同八日鎌倉殿聖佛に御對面有つて、直に義經の事を御尋ね有りと也。伊豫守は國家を亂さんとする凶臣なり。逐電の後宣旨に任せ諸國を搜し求め誅戮せんと欲す。天下の人皆以て渠を背く處に、貴坊義經が爲祈禱致され、刺へ同意せらるる由聞え有り。其の企て如何なる事ぞ。聖佛仰せを承り、些とも騒ぎたる氣色もなく申して云はく、伊豫守殿君の御代官として、平家を追討



の刻、凶徒誅罰の御祈禱を致すべきの由、慰撫の契約にて、年來丹誠を抽んず。全く自餘の爲に非らず。最も君の御爲ならずや。其の後伊豫守殿君の御氣色を蒙り給ふ時、師檀の値遇を思ひ、南都に來たり給ふにより、相かまひて一旦の害を遁れ、退いて身を全うして憤りを謝し申さるべき由を申すに、伊豫守殿も御心解けて、如何にもして君の御氣色を休め奉るべきより外なしと宣ひしぞかし。情關東の安全を案するに、偏に伊豫守殿の大功にあらずや。然るに讒者の詞を御用ひ有つて、御對面有るべき處を腰越よりも追ひ歸し給ひ、忽に奉公を御忘れ、剩へ恩賞の地をも召し放され、大功空しくなる。人として何ぞ恨みの心出ですと云ふ事有るべからず。仰ぎ願はくは、日頃の御氣色を蘇し給ひて、伊豫守殿を召し返され、御連枝水魚の思ひをなし給はば、天下泰平の計略にても候はぬかと憚る處もなく、言美誠に爽かにして、其の鹿なしとにや。鎌倉殿、暫く御詞なく、動額詔かせ給ひしが、良有つて朝光を召され、上人を相伴ひ、宅に歸り、疎かにすべからずとて入らせ給へり。其の夜和田義盛を御使として、勝長壽院の別當職に補せられ、天下泰平の御祈禱を致すべきとの御事也。聖佛も兎角辭し申されけれども、暫く相務むべき由、御慰撫の仰せにより、聖佛も此の上は鎌倉に滞まるべし。終には伊豫守殿と御中和平の謀にも成りなんと思ひて、領掌申されしとなり。

(山口太郎家任)

但馬國の住人、山口の太郎家任と云ふ者あり。去る文治元年十一月、義經大和路へ落ち給ひ

し時、家任を召して、御邊は當家譜代の者なれば、義經が方へ参り（たる事、強ちに頼朝の尤め有まじければ、京に留り時節を窺ひ鎌倉へ参り）給へと宣ひし程に、家任承りて申すやう、某御家の御譜代の者なるに、かかる時節に至り、争でか見放ち申すべきや。何國までも御供仕らんと申したり。義經、辭言<sup>いやとよ</sup>。我が云ふに任せたらんには、先途を見届けたるに増さるべし。一條堀川の法眼が後家の方に我が娘一人あり。伊豆右衛尉に娶すべき由約諾す。有綱も吾に同意して流浪の身となる。我又行末を知らず。御邊が娘にして不便を加へ、有綱恙なくば必ず渠に嫁してたべ。此の事を偏に頼むなりと、最懇<sup>いよんどころ</sup>に宣ひし程に、家任辭するに處なく、領掌申し、京に滞りしとぞ。文治三年十一月廿五日、家任今出川の宿所に有りし處に、北條時政の者共押寄せたりしを、北條殿へ参りて、申し度き子細有るの由を云ひて、家任が方より（太刀）刀を渡したり。是に依つて相具して六波羅に参る。直に様子を尋ね給ふに、家任答へ申しけるは、某は源家御譜代の侍にて、六條判官殿の御代、親にて候三郎家修<sup>なぶ</sup>數ヶ所の領地を賜はりし處に、平家世を取つて候ひしより牢籠の身と罷り成り、木曾殿上洛の時、家のよしみを存じ、彼の手に屬し候。木曾殿滅亡の後、伊豫守殿へ参る事、頼み奉らんとこの事には候はず、伊豫守殿の御執奏を以て關東御家人を願ひ奉りてこそ候へ。則ち爲義公の御教書分明なり。是に依つて北條殿の執奏有りて本領安堵すと云へり。

（二七五）

文治二年有綱も討たれ給ふ。其の後義經奥州にて亡び給ひて後、家任彼の息女を我が娘と稱し、得業聖佛と示し合はせて、式部卿禪師に娶嫁せ、中道和尚を産むと云へり。延暦年

中に忠道和尚あり。其の忠道は忠に作り、義經の孫の中道は中に作る。(二七六)

(景時家人河津小五郎)

文治四年の秋の頃、梶原平三が家人、河津小五郎と云ふ者洛に上り、或夜頂法寺の觀音へ詣する(の處、參詣の者と見えて、男二人法師一人堂内に休み居たり。物語する)皆以て義經の事也。小五郎も休むていにて、何となく近寄り物語を聴くに、法師の云へるは、南都の勸修房も鎌倉へ呼び下され、判官殿の事御尋ね有りけれ共、勸修房能く申し分けられたりし程に、今は勝長壽院の別當職になり給ふ。山門の俊章房、仲教房、承意房などは、判官殿を奥州へ送り届け、俊章は鎌倉へ竊盜しどび上り、鎌倉の事をも窺ひ、判官殿への志の人々などをば機關かたひ、今は又京に上り忍びておはすなれ共、一味の人々は密々寄り會ひなどし給ふ程に、終には兵革にもなりなつかと小聲になりて語る。男の云はく、其の僧中は判官殿に所縁ゆかりある人々なるかと尋ねたるに、仲教は判官殿の舅、川越かわりの所縁の由承はる。意の事はしかと知らず。俊章は判官殿弱冠の頃とやらん、奥州より中上り有りし時、櫻本の御房にて見參らせ、其の時より志有りて、平家追討の節、丹誠を抽んで判官殿の祈禱をし給ひたると語るにより、川津先よりの物語を聴き、其の俊章は鎌倉殿の御尋ねの者なり。何方に有るぞ。眞直ますくに申すべし。さなくば己搦め捕つて拷問すべきの由、荒けなく尤とがめたるに、三人の者共、些ちつとも騒がず、人の嘶はなしを尤とがむる和主わすとは誰人と云ふに、梶原平三景時が郎等、河津小五郎と云ふ者也と云ふに、一人の男の棒

を杖に策いて居たりしが、いはせもはてず、小五郎が眉間みけんを懸はなつらへかけて健したたかに擲うちたり。敲うたれて眩暈めまふしたる處を、疊擲かさねうちに終に打倒されたり。供有りしに有りける僕、是はと云ひて立ち煽あかる處を、空臚からすね薙ながれて後へ倒れたる隙ひまに、彼の三人の者共行方知らずなりぬ。川津も漸漸とイ々イ起き揚りたれ共、すべきやうもなくして旅宿に歸りしが、打擲にあひたる事を面目なくてや思ひけん、京にては沙汰せざりけり。鎌倉に歸り、俊章京に忍びて有るよしを主の景時に告げたり。景時則ち言上す。これに依りて同年十月の頃、在京の御家人に仰せ付けられ、俊章並びに同類を相尋ねらるれ共、其の事分明ならず。頂法寺にての事は承仕法師の傍に居て、其の時の始終を見て語りしとにや。

(鈴木重家)

同五年三月北條五郎時連、伊豆の國府に於て、鈴木三郎重家を生捕る。時連國府に至るの時、僕從一人連れたる男に往き逢ふ。時節ときふし、時政の家人、源藤太廣澄と云ふ者、時連の供したり。重家を能く見知りて、後より抱く。此の廣澄は山本兼澄を夜討の時案内したる者也。伊豆國に名を得たる強力也。重家抱だかれながら刀を抜いて廣澄が弓手の腕かひなを縫ぬいひざまに貫く處を、時連の家人下り合ひて、終に虜いけどり、僕從共に召捕り、鎌倉へ進らすの處、重家を庭上に召され、頼朝公直に御尋ね有りしに、重家申して云はく、伊豫守殿都をひらき給ふの時、某は紀州藤代に候ひて存ぜず。其の後も伊豫守殿の御在所分明ならず候により、遲參申す處に、今奥州

にましますの由。これに依りて御先途を見届け奉らんが爲奥州へ赴くの由申し上ぐる。鎌倉殿聞召されて、伊豫守は國家を亂らんとする逆臣なるに、汝渠を慕ふ志奇恠なりと仰せらるるに、重家承りて、伊豫守殿國家を亂し給はんとの上意何事ぞや。一切の強敵を平らげ給ふ大功を捨て給ひて、鎌倉へも入れられず、腰越より追ひ上し給ふ而已に非らず。故なく恩賞の地を召し放され、剩へ昌俊法師を討手に上せ給ひしに依つて、其の害を遁れんが爲に、院宣を申し下し給へる事、偏に君の御計略にてこそ候へと一寸も憚る處もなく申す。賴朝公聞召され、義經が大功何なるぞや。木曾を亡し平家を平らげし事は、賴朝軍勢を遣はす餘計に非らずや。其れを何ぞ義經一人の功に備へて、院の御氣色能き儘、他の嘲りをも顧みず、我意を行迹ふの條、諸人の噂する處分明也。重家承り、些し頭を動揮つて、君は日本國の侍の棟梁にて渡らせ給へば、勇士の道御前にて申上ぐるに及ばざる事ながら、軍は勢の多少に依るべからず。既に以て三河守殿の御勢と伊豫守殿の御勢、何れ猛勢に候や。其の功何れか勝れ候や。平家攝津の國一の谷、讃岐の八島に籠りし時、伊豫守殿の御勢と平家の勢と何れが多勢に候や。是を以て愚意に存じ候は、只將の器量にもや候はんか。景時が己が小智を以て渡邊福島にて大儀を謀らんとするを、伊豫守殿用ひ給はざる事を恨み、僻言計り支へ申すを、君御用ひ有るに依つて、眞を存じ候輩も時の權威に押されて申し上げざる事世の風俗なれば、是非なく候。國家を亂さんとし給ふ伊豫守殿の御所存、全く他の爲す所に非らず、君の御心にこそ候へと申したりしに、御前の諸士、(皆)功なる申し様かなと囁言きあへり。鎌倉殿、其の後は仰せらるる御詞

もなくして、奥に入らせ給ふの後、重家をば佐原十郎に御預け有りて、渠が父庄司は六條廷尉の不便を加へ給ふ者なり。何ぞ當家に不忠を存すべき。義經に屬するの條、一旦の義なれば、御家人に召し加へられ本領安堵すべしとの仰せにて、重家領掌申し、暫く鎌倉に徘徊したりしが、終に鎌倉を忍び出でて、奥州衣川の館へ参りしと云へり。

（義經討死）

（一七八）

同閏四月晦日辰の刻、本吉の冠者高衡を大將として、伊賀良目七郎高重、佐藤三郎秀員追手の道を廻り、衣川の館を襲ふ。義經の郎從鎌を揃へて暫く防ぐ後、門を閉ぢて郎從一人も出でず。泰衡が家人、伴の藤八、同藤九郎とて奥州に名を得たる剛の者有り。先陣に進みて、龜井、片岡は何處に有るぞ。武藏房はなきか。出で合ひて勝負を爲べきの由喚ばはりけれ共、少々箭を射出だしたる計りにて、敢へて出づる者もなし。程なく館に火かかり焼け出でたりと云へり。義經の郎等皆以て死生知れずと云。夜に入つて義經の死骸並びに室家息女の死骸を捜し出だすと雖も、焼け頼れ墮ちて、其の形分明ならず。息女の死骸は見えすと云へり。

（義經室家仕女物語）

同年九月五日夜に入りて、尼女一人、師岡兵衛尉重經が旅宿に尋ね來たる。是義經の室家の仕女なり。重經に所縁有るに依つて頼り來たる。彼の尼申して云はく、金剛別當の子息、下須

房太郎秀方、歳十三、常に衣川の御館に参候す。其の節も参りて逗留ありしに、晦日泰衡が軍兵寄するの由告げ來たる時に、伊豫守殿、秀方を召して、汝は早く歸宅すべきの由仰せ有りに、秀方申して云はく、かかる急難の所に参り、見捨てて歸る事有るべからず。御先途を見届け申し、君若し御命を墮し給はば、我命を捨つべき由を申す。伊豫守殿泪を流し給ひ、汝一人是に滞りたり共、全く義經が爲に非らず。速く歸りて泰衡に忠を致すべきの由宣ひて、則ち雑色武貞を屬けて、金剛別當が方へ送り歸し給へり。伊豫守殿の家人甲冑を帶する處に、早泰衡が勢襲ひ來たる。軍始むるの時、女中五六人裏門より逃げ出でて散々に成つて、其の行方知れず。此の尼は暫く關山の邊に隠れ居て、其の後中尊寺の別當大法師心蓮を頼みて尼になると云へり。重經、郎等を付けて、川越重頼（老母の方へ送り遣はすと云ふ）。義經没落の後、川越重頼（所領伊勢國香取五ヶ郷召し放され、川越一所は老母に賜はる。重頼義經を愛し、志深く有りし。子息重房は義經の弟子也。彼是以て義經に同意の風聞有るゆゑなりと云へり。下河邊四郎政義弟）妻は義經室家の姉也。是も義經に同意の沙汰により領地常陸國南部を召し放さるると云へり。

（義經奥州下向）

義經奥州へ落ち給ひし時、山伏の姿になり給ふ。郎等皆以て其の姿となる。妻室（二七九）重頼息女仕女等、或は兒立に似せて、彼は五十人計り、國々の難苦を凌ぎて、北國海道を通り給ふと云へ

(二八〇)

り。井上左衛門、越前の金津の上野にて行き逢ひ奉る。義經を見付け申し、馬より下りて所用有る鉢にて横道へ剪れたり。郎等が小聲になりて、判官殿の御通りの由を告ぐる。井上聲を噴らして、伊豫守殿は鎌倉殿と不和になり給ひ、今は御敵なるを、吾等でか通し申すべきや。汝は主を盲目なると思ふにや。誠の山伏達に無禮有るまじきの由を云ひて、各々を通し遙か有つて本道に出でたるとなり。

加賀國富樫介が關所を通り給ふ時、辨慶計略うて通し奉ると云ひ傳へり。

(二八一)

或は曰はく、彼の關を通り給ふ時、富樫が家人見咎めたりしを、富樫大きに制して、誠の客僧達にて渡り給ふものを、不淨の身として近付き申さん事、明王の照覽計りがたし。笈には定めて熊野權現の移り給ふらんと、椽より降りて、大地に蹲踞き、頭を傾けて各々を通したりと云々。

(賴朝奥州征伐)

義經平泉へ下り着き給へば、秀衡方人して、民部卿基成朝臣の衣川の館へ入れ奉る。秀衡所存にも、其の身存命の内は別義有るまじけれ共、秀衡死後には、假ひ伊豫守殿なくとも鎌倉殿より兩國の内へ手を入れ給ふべきと兼々思ひてければ、義經の下向を幸ひの事と思ひて時節を計らひたるとにや。義經奥州にまします由鎌倉へ聞えければ、賴朝公安からず思ひ給ひて、七道の軍勢凡そ二十六萬餘騎引牽し給ひ、奥羽兩國に發向ある。先陣は畠山重忠、宇都宮父子三



人、千葉新介、佐竹六郎、其の外常州野州の國人相集り十萬餘騎、白川の關に着陣ある。秀衡是を聞きて、義經を大將として、子供を始め、國人彼是十二萬餘騎の勢、檜山に陣を取る。爰に於て義經鎌倉勢の先陣已に白川、頼朝の陣は未だ宇都宮に有るの由を聞き給ひ、十二萬餘騎の内を引分つて、六萬餘騎にて白川に向はる。秀衡が子共並びに國人等、大勢着陣有るなるに、小勢にて向ひ給ふこそ意得ねと囁きけれ共、義經聞かぬ由にて、二日路を一日一夜に策つて白川に着き給へば、夜は未だ寅の上尅なり。中々軍勢を休めては悪かりなるとて、八手に分ちて、各々一人の大將を付けて、相圖を定めて、吾が身は手勢二千餘勢騎にて重忠が陣の後の高き峯に上つて陣を見降して、火を挙げ給ふ。追手の軍勢凱歌を發して責め戦ふ。敵陣思ひ寄らざる事なれば、驚き騒ぐ處へ、義經二千餘騎にて重忠が陣の後に鯨波を上げてければ、畠山が三萬騎靡き立つて、則ち陣屋に火をかけたなり。諸軍勢是に周章て騒いで散々に落ち失せてけり。軍散じて後、國衡、泰衡、宇都宮へ寄せんと云ふ。義經の曰はく、然るべからず。兄にて候頼朝師左様に疎き人には非らず。今見給へ。是に未だ義經控へたりと謂はば、明日の未申の尅には一定是へ大勢にて寄せんずるぞ。小勢の軍に草臥れて、各々油斷して有らん處へ、荒手の大勢にて來たらんに、八百度勝つべきや。又宇都宮に寄せたり共、此の合戦に草伏れたる軍勢、二日路を経て行かんに、物の用には立つべからず。其の上頼朝は宇都宮が城にぞ有りなん。陣の構へも無下に淺間には有るまじければ、只是より引返し給へと宣ひければ、兄弟も又軍勢も下知に隨ひて本陣へ引返したり。鎌倉殿には宇都宮にて白川の陣の敗北の由を聞き給

ひ、こは如何にと按じ給ひしに、結城朝光申して云はく、伊豫守殿、すすどく、如何にも上り勝なる軍をする殿にて候へ。自ら定つて北ぐる敵に追ひすがうて是へぞ寄せ給ひなん。御要心有るべしと申す。頼頼公仰せらるるは、義經一人如何に勇なり共、(其の)勢の分際幾程も有るべからず。勢極山より白川まで二日路を來たり。軍をして又是へ二日を経て來たらんに、糧の盡きずと云ふ事有るまじ。其の上草臥れずと云ふ事なし。能き擒ごさんなれ。騒ぐべからずと宣へば、江間義時申さるるは、攝津國一の谷の合戦の時も、勝ち給ひて後、首實檢なんど宣ひて、緩々と侍りつる、今も左こそ御座しまさん。此方よりも寄せ給ひたらんには、一定味方勝ち軍とこそ存じ候へと申されければ、頼朝公聞召され、江間殿の宣ふ處のやうには候はず、頼朝も寄せ度く候が、義經、師頼朝を敵に受けて、左様に油斷すべき者に非らず。今聞き給へ。人を見せに遣はさんずるぞ。本陣極山まで引くか。又は一日路か引退かんずるぞ。其の故は前の軍敗れぬと云はば、定めて頼朝大勢にて白川に着きなん。其の時義經又出でて此方の大勢の陣を取り、靜ならざる處へ押寄せて、陣を取り、手詰の軍すべしと思はん者なれば、頼朝は又渠が兄なり。何ぞ其の計略に落ちんや。今此の堅き陣なんどへは、中々寄せまじく候ぞと宣ひて、最騒ぎ給ふ氣色もなかりしと云へり。使歸りて白川には敵一人も候はずと申す。御兄弟の師相應せりと各々舌をぞ振ひける。鎌倉殿初の軍に仕損じ給ひ、義經が有らん程は、此度奥州へ発向しては利有るまじとて引歸し給ふ。

(秀衡死去)

文治三年十月廿九日、秀衡死去有り、其の刻泰衡國衡以下の子供、其の外家の子を近く讀めて、我斯く有らん程は、鎌倉殿如何に思召す共、左までの事も有るまじ。死後は又大軍を引率ゐて下向有らん。伊豫守殿を大將軍として軍すべし。兩國の軍士心を一つに仕たらんに、鎌倉殿の大軍怖るに足るべからずと云ひ置きたるとなり。然る後鎌倉殿よりも伊豫守討ち參らすべきの由度々仰せ遣はさる。又勅使官史生國光、院廳官景弘を遣はされし時も、丁寧に持賞し領掌申したる風情なれ共、内心には敢へて用ひざる内に、兩國の國人も心區々になり、又は一族樋爪太郎俊衡入道、五郎季衡を初めとして、其の心計りがたく見えたり。泰衡國衡も、是にては始終如何と思ひたるとぞ。義經も兼ねて心得給ひて、文治四年の頃より、常陸房海尊を蝦夷へ遣はし、日頃彼の島の者共を愛付け給へり。其の外片岡、武藏房なんども人知らず渡海したると云ふ。

義經自害の事は、或は曰はく、鷲尾義久御命に代らん事を願ひて、義經を佚道より出だし奉りて、其の後衣川の館に火をかけ自害したると沙汰あり。兼ねて斯くあるべきと各々思ひたるゆゑにより、秀衡死後計略有るとにや。義經も兼ねて持佛堂の椽の下より拔坑を拵へ置き、日頃儲け置きたる舟に乗りて、蝦夷に至り給ふと云へり。妻室の死骸の事、其の心得有りて仕女を殺したるか。

又或沙汰に曰はく、衣川の邊に貧女の三四歳計りなる女子を持ちたるあり。辨慶是を憐みて衣川の館へ呼び入れて、室家の下女にして不便を加へたりしが、後彼の貧女親子の行方知れず。此の者を室家の命に代らせたと云ふ評あり。又泰衡が衣川へ軍兵を（寄するに）道筋（程）近き順路の能き裏道あるに、其れをば捨てて道も遠き追手より、物の鳴り音高く寄せたるも不審（いふかし）。同年八月奥州責めの時も、泰衡平泉を落ちて、蝦夷（えぞ）の方へ赴きたる事、兼ねて義經と示し合はせたるか。義經のまします衣川の館へ常に河邊太郎高綱（佐藤が叔父、金剛別當秀綱、佐藤庄司基治等昵近く参候するに、鎌倉殿より泰衡を偽寄し給ふ事も、綸旨の事なども、義經の前にて雑談ありし。泰衡衣川を襲ふ十日程前も、民部卿基成朝臣、河邊太郎、佐藤庄司等衣川へ参向して、終日密談の事あり。其の後又四五日を経て、河邊太郎参り、一日物語して歸宅して、其れ以後は参らずと云ふ。是等の事を思ふに、蝦夷（えぞ）へ落ち給ふ事も泰衡兼ねて示し合ひたるか。

（忠衡討死）

同年六月廿五日の夜、勾當八秀實を大將として、八十餘騎、和泉三郎忠衡が泉屋の館を襲ふ。忠衡が郎等箭を放ちて是を防ぐの後、館に火をかけて、忠衡自殺す。夜に入りての事なれば、無量光院へ既に火からんとす。軍兵並びに寺僧等、此の火を防ぐ。此の寺は秀衡の建立、則ち菩提所なり。新御堂と號す。宇治の平等院を圖すと云へり。秀衡自ら扉（とびら）に畫く。金銀

を鑲め、誠に結構す。忠衡が館は無量光院の東門の邊、泉屋と云ふ所に有り。これに依つて和泉冠者忠衡と云へり。忠衡が死骸も焼け損じて、其の形分明ならずと云へり。

此の忠衡も蝦夷へ落ち行きたると云ふ沙汰もあり。兄弟云ひ合はせたるか。其の實知れずと也。義經は自害し給ひ、郎等は皆失せたりと披露しけれ共、郎等の内一人も外にて見えぬ。又御臺所の仕女など死にたりしも沙汰もなし。泰衡詮議にも及ばず打過ぎたる事、日頃蝦夷の事を能く知りたるにやと云ふ人も有りしとなり。

永祿評定記に、

永祿十二年十二月、將軍義昭公、奥州津輕の商人に、蝦夷島の事をお尋ね有りしに、二百里計り通り見候ひて、其の奥は知らざる由を申す。其の後松前の者に、奥に渡り一年程逗留したる者に御尋ね有りしに、深山多く寒國にて、所に粟、黍、栗、柿等の物候。端蝦夷の方は屋作りもなく、岩窟などを家として、畜生の如く、鹿狸やうの獸を毒の箭にて射殺し食し候。奥蝦夷は端とは違ひ、人の形も風俗も寛に候。源義經、衣川の館を落ちて、此の嶋に渡り給ひて、島の司となり、今義經大明神と崇め、日本の伊勢大神宮の如く恐ろ怖れ候。本社義經同御臺所、姫君と申し候。末社九社、辨慶、片岡、鈴木、龜井、熊井太郎、源八兵衛等の者共と申し候と申す。義經の子孫の事御尋ね有りしに、子孫の沙汰承らずと申したるとなり。

(一八八)  
東鑑に曰はく、文治五年閏四月卅日、今日於<sup>國イ</sup>奥州<sup>國イ</sup>秦衡襲<sup>國イ</sup>源豫州<sup>國イ</sup>、是又任<sup>且</sup>勅証<sup>且</sup>、且依<sup>三</sup>(二品)仰<sup>二</sup>也。豫州在<sup>三</sup>民部少輔基成衣川館<sup>二</sup>、(秦衡)從兵數百騎馳<sup>三</sup>至其所<sup>二</sup>(合)戰。豫

州家人等、雖ニ相防一、悉敗績、豫州入ニ持佛堂一、先害ニ妻廿二子女子四才、次自殺。前伊豫守從五位下源朝臣義經(改)義行又義顯、年三十一左馬頭義朝臣六男、母九條院雜仕常盤、壽永三年八月六日任ニ左衛門少尉一、蒙ニ使宣旨一、九月十八日叙留。十月十一日拜賀六位尉時、不申畏、(則)聽院內昇殿一。廿五日供ニ奉大嘗會御稜行幸一。元暦元年八月廿六日、賜ニ平氏追討使官符一。二年四月廿五日賢所自ニ西海一遷宮、入ニ御朝所一問供奉。廿七日補ニ院御厩司一。九月十四日、任ニ伊豫守一使如元。

文治元年十一月十八日解官。

(八九)

文治五年六月十三日、泰衡使者新田冠者高衡、持ニ參豫州首腰越浦一、言ニ上事由一、(仍)爲ニ加ニ實檢一、遣ニ和田(太郎)義盛、梶原(平三)景時等(於)彼所一、(各)著ニ甲直垂一、相ニ具甲冑郎等二十騎一。件首納ニ黑漆櫃一浸ニ清一美酒一。高衡郎從二人荷ニ擔之。(昔)蘇公自(者)自(擔)其從イ纒一獲。今高衡者、令レ入荷彼其首一。見者(皆)拭ニ双淚一濕ニ兩衿一云。

### (義經首葬)

因幡前司廣元、和田義盛に云へるは、伊豫守殿の御首、若しも眼指さしめ變りたる事有らば、鎌倉の内へは用捨有るべし。能々意得致さるべしとなり。義盛領掌す。直に藤澤に葬ると云へり。

(九〇)

相模國白鳩大明神の事、往昔里人あまの普く夢見らく、義經辨慶大きな龜に乗りて、此の所に來たり給ふ。里人夢中に怪しむの處に、伊豫守源義經、武藏房辨慶と名乗り給ふ。是に依

つて其の所に社を建て神と崇む。今の白鳩大明神是なり。辨慶も末社と崇むと云へり。或は曰はく、三州岡崎淨瑠璃曲輪くるわに義經の畫像有り。烏帽子に裝束卷物を持てり。世に云ひ傳ふは、此の像元來蝦夷が島にありし、中興山伏なかきやうの來たりて、此の畫像を岡崎淨瑠璃曲輪に納むとにや。此の所に淨瑠璃姫の影ありと云へり。故に淨瑠璃廓くるわと號なづくと云ふ。

昔時そのとき藝州毛利家の侍に、佐世石見守と云ひし者あり。此の者語りて曰はく、某が祖父は雲州の者也。渠かれが弟に佐世新十郎と云ふ者落髮して、安樂齋と號し、桑門そうもんの如くなりて廻國す。享祿の頃か關東に赴き、其れより蝦夷が嶋に渡海す。時に同伴の士に美弱の者一人あり。異名に此の者を判官と呼ぶ。蝦夷人の前にて、異名を云ふ。島人は聞きて、甚だ怖お畏るおそ躰にて、其の座を去りて、數十人催し來たり、氏神の子孫か、拜むべきの旨を云ふ。安樂齋しかじかの由を理ことわるといへども、敢へて用もちひずして終に彼の美弱の士を座上に置きて、各々圍繞おほわう渴仰かつかうしたり。其の頃蝦夷が島に義經の像とて、烏帽子に裝束したる影、又辨慶が像とて、具足を着し、色々の挿物さくぶつしたる畫を家々の門戸に押してあり。義經の社に義經大明神と額あり。又義經の郎等の壘しろとて其の頃までは少々残りて有りしとなり。其の後も彼の嶋へ渡海の人有りし。其の時も斯くのごとくなる事ありしとなり。又播磨國野口の里教心寺の開山、教心上人は源義經の由、高館を落ちて此の所に至り、發心あり。教心と名をつき、討死したる郎等の菩提を吊ひ給ひしが、其の身も爰にて遷化あり。其の跡に一字を建立して教心寺と號すと里人は云へり。若し波多野右馬允義經なる

か。治承四年頼朝公の責めを受けて、討手下河邊庄司行平寄せ來たらざる前に、相模國松田郷にて自殺すとあり。謀りて其の期を遁れたる事もや。

其の頃又近江源氏、山本兵衛義經などの同名あれば、其の實如何。

(一九二)

往昔奥州に残夢と云ふ者あり。出生行年知れず。元暦文治の事を能く語る。義經又は家人の人相まで語る。義經は今世に云ふやうにはあらず無男なり。辨慶も人の云ふ如くなる姿にてはなく美僧と云へり。常に常陸房海尊なる由自稱す。主君の滅期の所なれば懷しく、其の跡を慕ひて、衣川の邊に至る所に、老翁來たりて、我に赤色の菓を與ふ。其の味甚だ美なり。其の後無病長命と云へり。古き事を知りたる者ありて、昔の事を尋ぬる時は、其

の答分明ならず、

世人不分明イ  
偽詐の輩なりと云へり。

(一九三)

神社考、都の良香の條下に云ふ、近世有<sup>レ</sup>人云、奥州有<sup>二</sup>殘夢者<sup>一</sup>、自字曰<sup>二</sup>呼白<sup>一</sup>、又自稱<sup>二</sup>秋風道人<sup>一</sup>、不<sup>レ</sup>僧不<sup>レ</sup>俗、風顛狂漢、自(曰)與<sup>二</sup>順一休<sup>一</sup>友善、得<sup>二</sup>其禪要<sup>一</sup>、又時々與<sup>レ</sup>人語(以元暦文治之事)而曰、其時義經爲<sup>二</sup>何事<sup>一</sup>、辨慶爲<sup>二</sup>其事<sup>一</sup>、誰某作<sup>二</sup>此事<sup>一</sup>、與<sup>二</sup>平氏<sup>一</sup>戰<sup>二</sup>于某<sup>一</sup>、其話始如<sup>二</sup>親見<sup>一</sup>之者、人恠詰<sup>レ</sup>之、則曰、我忘<sup>レ</sup>之矣、浮屠天海及松雪云者遇<sup>二</sup>殘夢<sup>一</sup>、々々好<sup>二</sup>枸杞飯<sup>一</sup>食<sup>レ</sup>之、海亦喫<sup>レ</sup>之、與人語曰、殘夢長生、不<sup>レ</sup>速<sup>レ</sup>事而服<sup>二</sup>枸杞<sup>一</sup>故也。人恠<sup>レ</sup>之曰、彼蓋常陸房耶、海聞喜<sup>レ</sup>之、人送<sup>二</sup>枸杞<sup>一</sup>、海受爲<sup>二</sup>菜飯<sup>一</sup>餌焉、海之言曰、任意隨<sup>レ</sup>時勿<sup>レ</sup>急勿<sup>レ</sup>速、緩々慢々、是延<sup>二</sup>壽命<sup>一</sup>、人或信<sup>レ</sup>之、嗚呼浮屠妖惑之弊、無<sup>二</sup>所不<sup>レ</sup>至、昔漢文之好<sup>二</sup>長生<sup>一</sup>也、文成五利之僞說<sup>レ</sup>帝曰、黃帝不<sup>レ</sup>死、帝羨<sup>レ</sup>之封禪、然其効亦可



觀矣、今日、殘夢不<sub>レ</sub>死、然其何在哉、彼一詐也、此一詐也、由<sub>レ</sub>是觀<sub>レ</sub>之、人君之嗜好不<sub>レ</sub>

可<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>慎。

(二九五)

昔時古老云はく、伊豫國久萬<sub>くま</sub>と云ふ山里に珠懷と云ひし法師、出づる常に碧巖を講談す。人有りて其の出所を尋ぬるに、和州檜川と云ふ所の者と云へり。十四の年多武峯に登りて十字坊堯願の弟子となり、名を堯全と云ふ。十字坊の屋十文字に造る(故)に坊號とす。堯願は義經の繼父、一條大藏卿長成朝臣の祈りの師にて、義經弱冠の比より昵近<sub>きんきん</sub>深きゆゑ、頼朝と中違ひ給ひて、十字坊を頼み多武峯に來たり給ふにより、堯願頼まれ參らせ、戸津川の方へ義經を送り遣はす。其の事露顯して京都よりあらため有るによつて、十字坊、彼の山を逐電す。某も在所檜川にかへり住す。或時吉野の奥に至るの時、一人の老翁に逢へり。其の粧ひ甚だ以て殊勝なり。是に隨ひて暫く奥山に遊ぶの後、檜川に歸り、又奥山に入りて、彼の老翁を尋ぬるといへども、再び其の在所知れずして里に歸る後、病む事なうして命長しと云ふ。昔の事を問ふに分明なり。誠に不思議の事と人々沙汰す。其の頃道後の垂水<sub>たるみ</sub>圖書の助通弘と云ふ者、二神宇賀島と云へる兩人を伴ひ、大山寺の觀音に詣する所に、堂内に於て、彼の珠懷に行き逢ふ。則ち相伴ひて坊に立寄り、昔の事を尋ぬる。珠懷云はく、義經都にましますの時、師の堯願、彼の館へ折々參向す。又義經都をひらき多武峯へ來たり給ふ事、正しく見たる事なれば、荒増<sub>あらまし</sub>覺ゆると云ふ。義經は云ひ傳ふ如く美男の人なり。辨慶も世に云ふ如くなり。骨太<sub>ふと</sub>き天性<sub>うまれつき</sub>なり。世人も強力<sub>がうりき</sub>の沙汰したり。辨慶師

の堯願と園基をうち、辨慶負けて腹立せし事などを語る。其の外郎等共の事を吐すに、其の言便ち爽かなり。堯全は日本國普く順國す。心の滯る所に遊樂す。心の滯る所に遊樂す。四國に遊ぶ事七年、去年當國に來たると云へり。能く菓を食す。垂水珠懷が事を、河野彈正小弼通宣に語る。通宣其の嘲を聽かんが爲に珠懷を招きに久萬の郷へ人を遣はす。其の刻限にや、珠懷里人に云へるは、河野殿我を招き給ふべき由今日宣へり。明日必ず人來たるべし。我は讃州に約諾の事有り。彼の方へ赴くべしと云ふ。里人恠みて、河野殿今日宣ふ事其の道遠かなり。争でか只今其の事の知るべきとて用ひざる處に、果して其の使久萬山に至る處、珠懷行方知れずと云。鎌倉明月院に義經の守りの舍利一粒あり。金塔に入る。往昔古河の御所にありしを、此の寺に納め給ふ。元は金紋紗の直垂の袖に包みて有りしを、其の袖は古河に残せり。

## 略注

- (一) 尊卑分脈、道兼流、宇都宮、宗綱の子に、知家、筑前守、號八田四郎、實者下野守源義朝子とある。
- (二) 宇都宮朝綱、尊卑分脈、左衛門尉、武者所、依伊勢訴、配土佐國と。
- (三) 尊卑分脈、義門、早世とある。
- (四) 尊卑分脈、全成、ゼンサイ。童名今若丸、號惡禪師、阿野法橋、建保年依平義時命、仰金蓮左衛門尉之等誄之云々。

(五) 尊卑分脈、圓成、エンシヤウ。祇候八條坊官、號今禪師卿云、改義圓、養和元正廿四、於濃州洲候

川、爲平家討了、年廿七才と。

(六) 平治物語卷中に詳し。

(七) 平治物語卷下に詳し。

(八) 續群書類從卷一一七所收。

(九) 平治物語卷下、「二月九日の夜に入りて幼き者ども引具して清水寺へぞ参りける。」

(一〇) 平治物語卷下、「宇陀郡龍門の牧岸の岡にいふ所に叔父のありしかば。」

(一一) 平治物語卷下、「常盤今年二十三、九條の女院の後立の御時、都の中より眉目よき女を千人そろへて、その中より百人、又百人が中より十人すぐり出されける、その中にも常盤一とぞ聞えける。」義經記卷一、常盤都落參照。

(一二) 屋代本平家、劔卷、

「九の年鞍馬の一和尚、東光坊の阿闍梨圓忍が弟子、覺圓坊の阿闍梨圓乘に付いて學文して居たりけるが改名して遮那王とぞ申しける。」

流布本平治物語卷下、「東光坊阿闍梨蓮忍が弟子、禪林坊阿闍梨覺日が弟子となつて遮那王とぞ申しける。」

(一三) 義經記卷一、「良智坊の阿闍梨。」

(一四) 義經記卷一、「四條室町。」四條坊門は四條より北三筋目の東西の路。

(一五) 義經記卷一、「鎌田三郎正近。」弟の事なし。盛衰記卷四十二、盛政光政が見え、盛政は一の谷にて討たれ、光政は屋嶋にて討たれたとある。

(一六) 九條家本平治物語卷下、「かの商人は元は公家の青侍にてありしが、身貧しく爲ん方なきに始めて商人になりけるが、今度九郎冠者に付いて、又侍になされ、窪彌太郎とぞ申しける。」吾妻鑑卷四、元暦二年六月二十一日、宗盛の子、清宗を斬る由が見える。平家物語卷十一參照。

屋代本平家劔卷、「承安四年の春の比、五條橘次末春と云ける金商人に相具して東國へ下ける。」

(一七) 九條家本平治物語卷下、「坂東武者の中に清助重頼と云う者あり。是も鞍馬へ参りける。沙那王に

かたらひよりて、……名をば誰と申すぞなどとへば、深栖三郎光重が子に、清助重頼といふ不肖の身にて候へども、源家の末葉にて候。さてはさうなき人ござんなれ……。」流布本平治物語巻下、「深栖三郎光重が子、陵助重頼と申して源氏にて候。」

(一八) 九條家本平治物語巻下、「承安四年三月三日のあつかき、くらま寺をぞ出でてける。」流布本も同じ。義經記卷一、承安二年二月二日と誤る。

(一九) 義經記卷二、鏡宿にて吉次宿に強盗の入る事では、由利太郎、藤澤入道等とする。

(二〇) 出所不明。

(二一) 平治物語巻下、「彼の宿の長者大炊が女、延壽と申すは、頭殿御志淺からず、思召されし女なり。かれが腹に夜叉御前とて、十歳にならせ給ふ御息女おはします。」

(二二) 吾妻鑑卷九、建久元年十月二十九日、「故六條延尉禪門最後妾、乙若以下四人幼息母、大炊姉、内記平太政遠保元逆亂時被誅、乙若以下同令自殺了。平三眞遠、出家後號驚栖禪源光、平治敗軍時、爲左典廐御供、廻秘計、奉送于内海也。大炊、青墓長者、此四人皆連枝也。内記大夫行遠子息云々。」

(二三) 尊卑分脈、貞嗣流、季範の子に祐範、法橋とある。範忠か。

(二四) 流布本保元物語巻上。

(二五) 流布本保元物語巻上。

(二六) 流布本平治物語巻下、「伏見源中納言卿、三河の八橋を渡るとて、夢にだにかくてみかはの八橋を渡るべしとは思はざりしをと詠まれたりしを、上皇聞し召し、哀れと思し召されければ、召し返せとぞ仰せなりける。」

(二七) 淨瑠璃十二段草子參照。

(二八) 平家物語巻四、蟬折を高倉宮以仁王が傳へ、三井寺の金堂へ奉る由が見える。

(二九) 久能山縁起、寫本一冊、舞窮會神習文庫藏(國書目錄)。

(三〇) 尊卑分脈、賴光流、深栖三郎光重の子に、勝重、諸陵頭、皇后宮侍長とある。

(三一) 義經記卷二、伊勢三郎義經の臣下にはじめて成る事參照。義經記に詳しい。

(三二) 尊卑分脈、中納言三位、文章博士、大學頭、三代侍讀、醍醐朱雀、號江總言、應和三六七薨七十六歳と注する。

(三三) 日本紀略、寛平六年(八九四)九月卅日、其日停遣唐使とある。延長元年は九二三年、矛盾がある。

(三四) 六韜三略。

(三五) 匡時、なし。

維時―重光―匡衡―舉周―成衡―匡房

維順―維光―匡範

(三六) 義經記卷二、義盛臣下になる事に、「親にて候し者は、伊勢の國二見の者にて候。伊勢のかんらひ義連と申して、大神宮の神主にて候ひけるが、清水へ詣うでて下向しける、九條の上人と申すに乘合して、是を罪科にて上野國ながしまと申すところに流され參らせて……」

(三七) 川島村。四日市の西二里許り、御瀧川の南岸にあり、字東谷西福寺境内に伊勢義盛の墓と傳ふる者あり……(大日本地名辭書)。四日市市川島町。松井本(片假名本)に、「川嶋村、勢州四日市場四五丁西ノ方ノ郷也、所ノ者ハアヤマリ義盛塚ト云」とある。

(三八) 所在不明。

(三九) 舊庄名。周桑郡吉岡村。

(四〇) 左大臣頼長の家司。保元物語卷中、左府最後の條、「式部大輔盛憲、馬より飛んで下り、御首を膝にかきのせ參らせ、御頸に袖を覆ひ奉りて泣き居たり。」

(四一) 義經記卷二、「生絹の直垂に緋織の腹巻著て、金剛履いて頭巾耳の際まで引つこうで、大手鉾杖に突きて。」

(四二) 松井本(片假名本)の頭注に、「憲海記二、姫ノ乳母名香樹ト云女ヲ頼ミ、姫ノ方ヘ艶書ヲヨクリ玉フ、歌アリ、シタモエノ思ヒモ今ハミチノクノシノブノ浦ノ海士ノ藻鹽火、姫、返歌、ヨシサラバシルバナウトモ陸奥ノシノブノ浦モフミハマヨハジ、其夜ハ五月十六日、姫ノツボネヘ入玉フトア

リ。」とある。

(四三) 宋の張商英の僞作。一卷。原始、正道、求人、之志、本德崇道、遵義、安禮の六篇よりなる。慶長頃の刊本がある。漢魏叢書附載のの序文は、「黃石公素書序、黃石公素書六編、按前漢列傳黃石公杞橋所授子房、素書世人多以三略爲是、蓋傳之者誤也、晉亂有盜、發子房塚、于枕中獲此書、凡一千三百六言、上有秘誠、不許傳於不神不聖之人……張商英天覺序。」

(四四) 尊卑分脈、北家賴宗流。宗通の子、康治元二三從二位、同二年正三正二位、久安五七廿八、權大納言、平治元十五出家、法名栖蓮、六十三。

(四五) 後白河天皇皇后。

(四六) 百鍊抄、安元二年(一一七六)七月八日、「建春門院崩御、卅五、帝母后、天下亮闇、上皇御歎息、葬新法華堂。」

(四七) 吾妻鑑、元暦二年五月十九日、「伊豆守仲綱男、號伊豆冠者有綱者、爲廷尉聲、多掠領近國庄公云々。」

(四八) 鞍馬の小学校附近の地。鬼一法眼の碑がある。

(四九) 温泉郡桑原村か。畑寺は四國順禮五十番の札所。本尊藥師如來。國司賴義朝臣の時に、河野親經が佛堂を建立したといふ(大日本地名辭書)。松山市畑寺町の繁多寺。

(五〇) 尊卑分脈、賴義の子に親清なし。

(五一) 松井本(片假名本)頭注に、「憲海記ニモ此歌アリ、返歌モアリ」と。

(五二) 洛陽伽藍記卷五、「佛本清淨、嚼楊枝植地、卽生、今成大樹」。

(五三) 後土御門天皇の皇子、後柏原天皇。

(五四) 文明年中、飛騨國司となる。藤原北家小一條流、權中納言。家綱―昌家―基綱。

松井本(片假名本)頭注に、「若宮ノ御房仰有シハ、公家ニハ在原業平、藤原重家、武家ニハ平經正、源義經ナドハ美男ナルヨシ舊本ニモ見エタリト基綱ノ妹ニ仰アリシトニヤ、文明ノ若宮ノ御房トハ後柏原ノ御事カ。」とある。

(五五) この段、松井本(平假名)は、湛海被斬の次に出ず。傳に曰く鬼一が娘云々の前に出ず。又この段、謡曲拾葉抄卷十一、二人靜に引く。

(五六) 桑田郡馬路村。千歳の西に接し、保津川の左岸の大村である(大日本地名辭書)。龜岡市馬路町。

(五七) 義經記卷三、辨慶、年時不明にて、「六月十七日五條の天神に参りて」、太刀を奪ひ取らんとするとある。

(五八) 義經記卷三、辨慶を比叡山の學頭、西塔櫻本の僧正の許遣はす由が見える。

(五九) 義經知緒記、勲功記、謡曲拾葉抄にも引用する。

(六〇) 義經記卷三、「園城寺法師の尋ねて参りたる常陸房」。同卷四、大物合戰の條、海尊。平家物語には見えない。盛衰記卷四二、屋嶋合戰、「武藏房、常陸房、舊山法師にて究竟の長刀の上手にて……。」

(六一) 熊野別當代々記、「第廿二代行快、後鳥羽院建及九年七月七日補任、治山五年。」

(六二) 湛増か。熊野別當代々記、「第廿一代湛増、後鳥羽院文治三年補任、治山十二年。」

(六三) 故左馬頭源義朝。

(六四) 頼朝。

(六五) 蒲冠者範頼。

(六六) 左馬頭義朝。

(六七) 義經。

(六八) 源平盛衰記卷三六、源氏勢汰事、「片岡八郎爲春、備前四郎、鈴木三郎重家、龜井六郎重清、武藏房辨慶等をはじめとして。」

(六九) 鈴木三郎重家藤白住人、庄司重倫嫡男也。其先仕甲州武田信義、致軍忠、後屬範頼之手、勤西海合戰、領甲斐國一所、仕藤日白文治五年潛赴于奥州、弟龜井六郎與討死焉。六郎重清者、義經在京時、依有辨慶所縁小童而出從于義經、終同死于衣川、鈴木之末孫有于今(和漢三才圖會卷七十六、紀伊國)。

(七〇) 猿投神社。

(七一) 平家物語卷九、老馬、「熊王といふ童の生年十八歳になるをたてまつる。やがてもとゞりとりあげ、父をば鷲尾庄司武久といふ間、是をば鷲尾三郎義久と名のらせ、さきうちさせて案内者にこそ具せられけれ。」

(七二) 平家物語卷九、三草勢揃、源八廣綱、系圖未詳。

(七三) 平家物語卷十一、内侍所都入、「(元暦二年) 四月三日、九郎大夫判官義經、源八廣綱をもて院御所へ奏聞しける、……御感のあまりに左兵衛尉になされたり。」

(七四) 平家物語卷九、三草勢次、「江田源三、熊井太郎」。義經記卷四、「信濃國の住人江田源三。」

(七五) 平治物語卷下、「丹波國の住人、仕内六郎景澄」。義平を助けて平家をねらふ事が見える。

(七六) 義經記卷七、三の口の關の事、北方の隨行者に、龜井六郎、駿河二郎が見える。

(七七) 扇谷より西、深澤梶原に出る坂路。

(七八) 義經記卷八、衣河合戦にて討死。

(七九) 村上源氏。仁安三年八月十日任内大臣。五十一。承安五年二月廿七日薨。五十八。

(八〇) 大宮西。五佛。もと藤原伊尹の家。

(八一) 近衛基房。安元三年、三十四。

(八二) 平維茂の子孫といふ。

(八三) 源行家。平家物語卷八、名虎、壽永二年八月十日任備前守の由。

(八四) 平治物語卷上、源氏勢揃、鎌田兵衛政清。

(八五) 平家物語卷一、鹿谷、俊寛の與力としてその名が見える。

(八六) 鎌田兵衛政清。後に政家と改む。

(八七) 保元物語卷中、「爲義が山莊北白川圓覺寺にて烟とし」とある。

(八八) 吾妻鏡卷九、建久元年十月廿五日、「以尾張國御家人須細治部大夫爲基爲案内者、到于當國野間

庄、拜故左馬典厩廟堂、平治有事、奉葬于此所云々給」、康賴の寄附水田三十町、伽藍建立の事などが見える。



(八九) 平治物語卷下、詳し。

(九〇) 吾妻鏡、治承四年十月十三日、橘遠茂が長田父子を鼻首の由が見える。

(九一) 舞、「鞍馬出」。謡曲、「關原與市」と關係がある。

(九二) 片岡八郎弘經。吾妻鏡卷五、文治元年十一月三日、義經都落參照。

(九三) 吾妻鏡卷二、治承五年三月廿七日、同卷九、文治五年三月十日、片岡次郎常春とあり、平家物語卷

九、三草勢揃に、片岡五郎經春、卷十一、内侍所入に、片岡太郎經春とある。

(九四) 名女情比(なさけくらべ) (延寶九年初春刊) 卷三に、牛王姫牛若丸にあふ一章がある。牛王姫は

牛若丸に契り、清盛の探索の時に牛若丸を逃し、清盛に捕へられて水火の責めにあふが自ら命を絶つ

といふ話である。最後に、六波羅堂の前の松の古木は、この姫を責めた松であり、その木のもとに小

さい社があり、姫を祀つた社であるとある。

(九五) 次に、松井本(片假名本)、「土ノ小高キ所ニ松一本アリ、其下ニ社アリ」とある。

(九六) 一條大藏卿長成朝臣。常盤再婚の人。

(九七) 禪林房阿闍梨覺日。

(九八) 吾妻鏡卷一、治承四年十月廿一日、盛衰記卷二十三、義經軍陣來事參照。

(九九) 盛衰記卷四十二、屋嶋合戦の條、盛政は一の谷にて討たれた由が見える。

(一〇〇) 吾妻鏡卷三、元暦元年八月十七日、「去六日任左衛門少尉、蒙使宣旨……」。平家物語卷十、藤戸

にも同記事がある。

(一〇一) 吾妻鏡卷四、元暦二年六月十九日參照。

(一〇二) 吾妻鏡卷三、元暦元年九月十四日、「河越小太郎重賴息女上洛、爲相祿源廷尉也、是依武衛仰、

兼日令約諾云々、重賴家子二人、郎從三十餘輩從之首途云々」。

(一〇三) 平家物語卷十、藤戸、「御腹の行幸ありけり……けふは九郎判官先陣に供奉す。木曾などには似

ず、以外に京なれてはありしかども、平家のなかのえりくづよりも猶おとれり」。

(一〇四) 平家物語卷六、廻文、「父義賢は久壽二年八月十六日、鎌倉惡源太義平に誅せらる。その時義仲

二歳になりしを母なくなかへて信濃へこえ、木曾中三兼達がもとへ。」

(一〇五) 平家物語卷十一、嗣信最後、「黒き馬の太うたくましきに、金覆輪の鞍おいてかの僧にたびにけり。判官五位尉になられし時、五位になして、大夫黒とよばれし馬なり。一谷ひへ鳥こえもこの馬にてぞ落されける。」

(一〇六) 平家物語卷十一、壇浦合戦、「越中次郎兵衛申けるは、同じくは大將軍にくん給へ。九郎は色白うせいちいさが、むかばのことにさしいでてるかんなるぞ。」

(一〇七) 盛衰記卷四十二、屋島合戦、「建禮門院の后立の時、千人の中より選び出だせる雜司に玉蟲前とも云ひ、又は舞前とも申す、今年十九にぞなりける。」

(一〇八) 盛衰記卷四十二、「伊賀平内左衛門尉が弟に十郎兵衛尉家貞。」

(一〇九) その所在不明。

(一一〇) 流布本平治物語卷下、「兵衛佐宣ひけるは、首は故池殿につがれ奉る。……誓は織頼源五に續がれたり。但し盛安は雙六の上手にて、院中の御局の双六に常に召され、院も御覽せらるるなれば。」

(一一一) 近衛基房。

(一二二) 吾妻鏡卷一、治承四年十二月一日、「平知盛卿率數千官兵、下向近江國、而源氏山本前兵衛尉義經、同弟柏木冠者義兼等合戦……。」

(一二三) 吾妻鏡卷一、元暦元年二月七日、「但馬前司經正、能登守教經、備中守師盛者、遠江守義定獲之云々。」

(一二四) 平家物語卷十一、能登殿最期参照。

(一二五) 平家物語卷十一、内侍所都入、「四月三日、九郎大夫判官義經、源八廣綱をもて、院の御所へ奏聞しけるは、去る三月廿四日……赤間關にて平家をせめ落し。」藤判官信盛下向の由も見える。

(一二六) 吾妻鏡、元暦二年四月廿二日、「梶原平三景時飛脚自鎮西參着、差進親類献上書狀、始申合戦次第、終訴廷尉不義事、其詞云、西海御合戦間、吉瑞多之、御平安事、兼神明之所示祥也、所以者何、先三月廿日……。」以下吾妻鏡と殆ど同文。

(二一七) 平家物語卷十一、壇浦合戰、「元暦二年三月廿四日の卯越に門司赤間關にて源平矢合とぞ定めける、その日判官と梶原とすでに同土軍せんとする事あり……。」

(二一八) 松井本(片假名本)、何日ぞ、重複なし。

(二一九) 吾妻鏡卷二、治承五年三月廿七日、「片岡次郎常春、依有謀叛之間、遣雜色於彼領所下總國被召之處、稱亂入領内、乃傷御使面縛云々、仍罪科重疊之間、被召放所帶等之上、早可進件雜色之由今日被仰下云々。」

(二二〇) 吾妻鏡卷四、同日、「片岡八郎常春、同心佐竹太郎常春、有謀叛企之間、被召放彼領所下總國三崎庄畢、仍今日賜千葉介常胤、依被感動節等也。」

(二二一) 吾妻鏡卷四、元暦二年四月廿二日參照。

(二二二) 吾妻鏡卷四、同月廿六日、「今日前内府已下生虜、依召可入洛之間、……申刻各入洛、……皆悉入廷尉六條室町第云々。」平家物語卷十一、一門大路被渡參照。

(二二三) 吾妻鏡卷四、元暦二年五月十五日、「廷尉使者景光參着、相具前内府父子令參向、去七日出京、今夜着酒匂驛、明日可入鎌倉之由申之。」

(二二四) 吾妻鏡卷四、元暦二年五月八日、「因幡前司、大夫屬入道、筑後權守、主計允、筑前三郎參會……俊兼奉之。」

(二二五) 平家物語卷十二、文之沙汰に詳し。

(二二六) 平家物語卷十一、腰越、「九郎はこのたたみの下よりはひ出でんずるものなり。ただし頼朝はせらるまじとぞの給ひける。」

(二二七) 吾妻鏡、元暦二年五月十七日、「左典厩(能保)侍後藤新兵衛尉基清僕從、與廷尉侍伊勢三郎能盛下部鬪亂……。」

(二二八) 吾妻鏡卷四、文治元年五月二十四日、平家物語卷十、腰越狀參照。

(二二九) 春臺の湘中紀行に、滿福寺を過ぎ、この寺は腰越にて義經の留つた所で、後に寺としたもので、辨慶の腰越狀の草案がこの寺にあると云ふが、その贋物であるのを聞き知り、みようとしなかつた由

が見える（大日本地名辭書引用）。

（二三〇）吾妻鏡卷四、文治元年六月九日、「延尉此間逗留酒匂邊、今日相具前内府歸路……」。

（三二一）同卷四、六月廿一日、「延尉着近江國篠原宿、令橘馬允公長誅前内府、次至野路口、以堀彌太郎景光、梶前右金吾清宗……」同六月廿三日、獄門前樹に懸ける由が見える。

（三二二）吾妻鏡卷四、文治元年九月二日、「梶原源太左衛門尉景季、義勝房成尋等爲使節上洛也……行向伊與守義經之亭、尋窺備前司行家之在所、可誅戮其身由相觸……」同九月十二日、「景季成尋等入洛。」

（三三三）同十月六日、「景季自京都歸參、於御前申云、參向豫守亭、申御使由之處、稱違例無對面、仍此密事以傳不能、歸旅宿六條油小路、相隔一兩日又令參之時、乍懸脇足被相逢、其體誠以憔悴、灸有數箇所……」吾妻鏡と略同じ。

（三四四）吾妻鏡卷四、文治元年十月九日、「可誅伊豫守義經之事、日來被擬群議、今被遣土佐房昌俊、此追討事、人々多以有辭退之處、昌俊進而申領狀之間、殊蒙御感仰之……」從者、吾妻鏡に同じ。

（三五五）同十月十七日、「土佐房昌俊、先日合關東嚴命、相具水尾谷十郎已下六十餘騎軍士、襲伊豫大夫判官義經六條室町亭、于時豫州方壯士等、逍遙西河邊之間、所殘留之家人雖不幾、相具佐藤四郎兵衛尉忠信、自開門戶、懸出責戰、行家傳聞此事、自後面來加、相共防戰、仍小時昌俊退散。」

（三五六）平家物語卷十一、土佐房被斬參照。

（三六六）吾妻鏡、文治元年十一月廿六日、「土佐房昌俊并伴黨三人、自鞍馬山奥、豫州家人等求獲之、今日於六條河原梟首云々。」

（三七七）吾妻鏡卷四、文治元年十月三日、「去十一日並今日、伊豫守大夫義經潛參仙洞奏聞云……」大約吾妻鏡と同じ。

（三八八）明雲——覺快——明雲——俊堯——全玄——公顯。

（三九九）平家物語卷十二、判官都落參照。

（四〇〇）吾妻鏡、文治元年十一月廿九日、「爲征豫州備州等之叛逆、二品今日上洛給……土肥次郎實平候

先陣、千葉介常胤在後陣、今夜御止宿相模國中村庄云々。」

(一四一) 平家物語卷十二、義經都落參照。

(一四二) 吾妻鏡、文治元年十一月三日、「備前守、櫻威甲、伊豫守義經、赤地錦直垂、萌黃威甲、等赴西海、先進使者於仙洞申云……前中將時實、侍從良成、義經同母弟、一條大藏卿長成男、伊豆右衛門有綱、堀彌太郎景光、佐藤四郎兵衛尉忠信、伊勢三郎能盛、片岡八郎弘經、辨慶法師已下相從、彼此之勢三百騎敷云々。」

(一四三) 淀の江内忠俊。本家物語卷十一、逆櫓參照。

(一四四) 吾妻鏡、文治元年十一月五日、「今日豫州至河尻之處、攝津國源氏多田藏人大夫行綱、豐島冠者等遮前途、聊發矢石、豫州懸破之間、不能挑戰、然而豫州勢以零落、所殘不幾云々。」

(一四五) 吾妻鏡、文治元年十一月六日、「相從豫州之輩纔四人、所謂伊豆右衛門尉、堀彌太郎、武藏房辨慶并妾女字靜、一人也、今夜一宿于天王寺邊、自此所逐電云々。」

(一四六) 吾妻鏡、文治元年十一月二日、「豫州已欲赴西國、仍爲令儲乘船、先遣大夫判官友實之處、有庄四郎者、元與州家人、當時不相從、今日於途中相逢、問云……、相具進行、爲庄忽被誅戮延尉訖、件友實越前國齋藤一族也、垂髮而候仁和寺宮、首服時屬平家、其後向背相從木曾、木曾被追討之後、爲豫州家人、遂以如此云々。」吾妻鏡の友實は庄四郎の誤か。

(一四七) 平家物語卷十、重衛生捕、「庄四郎高家大將軍と目をかけ……」。兒玉黨の武者とある。

(一四八) 吾妻鏡、文治元年十一月十七日、「豫州籠大和國吉野山之由風聞之間、執行相繼惡僧等、日來雖索山林、無其實之處、今夜亥刻、豫州妾靜、自當山藤尾坂降到于藏王堂、其體尤奇怪、衆徒等見咎之、相具向執行坊、其問子細……。」

(一四九) 吾妻鏡、文治二年三月一日、「今日豫州妾靜、依召自京都參着于鎌倉、北條殿所被送進也、母儀磯禪師伴之、則爲主計允沙汰、就安達新三郎宅招入之云々。」

(一五〇) 同三月六日、「召靜女、以俊兼盛時等、被尋問豫州事、先日逗留吉野山之由申之……。」

(一五一) 吾妻鏡、三月廿一日、「當時所懷妊彼子息也。」

(一二二) 同四月八日、「二品并御臺所御參鶴岳宮、以次被召出靜女於廻廊、是依可令施舞曲也……崑山次郎重忠爲銅拍子、靜先吟出歌云、よしの山みねのしら雪ふみ分ていりにし人のあとぞ戀しき、次歌別物曲之後、又吟和歌云、しづやしづしづのをだまきくり返しむかしをいまになすよしもがな、誠是社壇之壯觀、染塵殆可動、上下皆催興感、二品仰云……」

(一二三) 吾妻鏡、五月一四日、同じ事が述べられてゐる。「靜頗落涙云、與州者鎌倉殿御連枝、吾者彼妾也、爲御家人身、爭存普通男女哉、與州不牢籠者、對面于和主猶不可有事也、況於今儀哉云々。」

(一二四) 吾妻鏡、文治二年九月十六日、「靜母子給暇歸洛、御臺所并姫君依憐愍御、多賜重寶。」

(一二五) 謡曲拾葉抄卷十一、二人靜の條に、以下の文を引用する。

(一二六) 西鶴名殘の友、「入日の鳴門の浪の紅」、「志筑といふ浦邊につきぬ、此所はむかし磯善司がむすめ靜がふる里といひ傳へて、木陰に塚しるしの石は苔むして見るもあはれを残せり」とある。

(一二七) 吾妻鏡、文治元年十一月廿二日、「豫州凌吉野山深雪、潛向多武峯、是爲祈精大織冠御影云々。到着之所者南院藤室、其坊主號十字坊之惡僧也、賞翫豫州云々。」

(一二八) 吾妻鏡、十一月廿九日、「十字坊相談豫州云、寺院非廣、住侶又不幾、……差惡僧八人送之、謂惡僧者、道德、行德、拾悟、拾禪、樂達、樂圓、文妙、文實等也云々。」

(一二九) 正平草。白地を柿色にそめ獅子、唐草などの模様及び所々に正平六年六月一日の八字を白く出だした草。正平六年征西將軍懷良親王が肥後熊本の革工に命じて染め出したものといふ。

(一三〇) 吾妻鏡、文治二年三月十五日、「伊豫前司義經橫行所々、今日參大神宮、稱爲所願成就、奉金作劍、此太刀、度々合戦之間所令帶之由云々。」

(一三一) 吾妻鏡、文治二年六月十三日、「去六日、於一條河崎觀音堂邊、尋出與州母並妹等生處、可召進關東敵由云々。」

(一三二) 吾妻鏡、文治二年六月廿二日、「左馬頭飛脚自京到來、豫州隱居仁和寺石倉邊之由依有其告、雖遣刑部丞朝景、兵衛尉基清已下勇士、無其實、而當時在叡山、惡僧等扶持之由風聞云々。」

(一三三) 大江廣元の兄。

(一六四) 平家物語卷六、嘔聲參照。

(一六五) 平家物語卷十一、嗣信最後、「後藤兵衛實基、子息の新兵衛基清。」尊卑分脈、藤原秀郷流、佐藤仲清の實子、後藤實基爲子とある。

(一六六) 吾妻鏡、元暦二年五月十七日、「昨日左典厩(能保)侍後藤新兵衛尉基清僕從、與廷尉伊勢三郎能盛下部鬭亂……。」同じ事が見える。

(一六七) 吾妻鏡、文治二年閏七月十日、「左馬頭飛脚到來、狀云、搦前伊與守小舍人童五郎丸、召問子細之處、至于去六月廿日之比隱居山上候之由、所申上候也……。」同七月廿六日參照。

(一六八) 村上源氏。公卿補任、仁安三年八月任内大臣。承安五年二月廿七日薨。五八歲。義經記卷七、判官北國落事、久我大臣殿とある。(七九) 參照。

(一六九) 吾妻鏡、文治二年九月廿二日、「糟屋藤太有季、於京都生虜與州家人堀彌太郎景光、此間隱住京都。」

(一七〇) 吾妻鏡、文治二年九月廿二日、「又於中御門東洞院、誅同家人忠信云々。有季競到之處、忠信本依爲精兵、相戰輒不被討取、然而以多勢襲攻之間、忠信并郎從二人自戮訖……尋往密通青女、遣一通書、彼女以件書令見當時夫、其夫語有季之間、行向獲之云々。」

(一七一) 吾妻鏡、文治五年八月八日、「佐藤庄司等爭死挑戰、爲重、資綱、爲家等被疵、然而爲宗殊忘命攻戰之間、庄司已下宗者十八人之首、爲宗兄弟獲之……。」

(一七二) 同文治五年十月二日、「囚人佐藤庄司、名取郡司、熊野別當等、蒙厚免各版本處云々。」

(一七三) 吾妻鏡、文治三年三月八日、「南都周防禦聖弘依召參向、爲豫州師糧之故也、日者、小川七郎朝光預置之、今日、二品有御對面、直及御問答、仰曰、豫州者欲濫邦國之凶臣也、而逐寇之後、搜求諸國山澤、可誅戮之旨度々被宣下畢、然天下尊卑皆背彼之處、貴房獨致祈禱、剩有同意結構之聞、其企如何者、聖弘答云、豫州爲君御使征平家刻……。」以下、大略本書と同文である。

(一七四) 吾妻鏡、文治二年十一月廿五日、「有但馬國住人山口太郎家任者、弓馬達者勇敢士也、而屬木曾左馬頭、爲近仕隨一也、被誅之後、在豫州之家、與州逐電之刻、同橫行所々之間、北條殿令生虜之、

所被召進也、……。」

(一七五) 吾妻鏡、文治二年六月廿八日、「去十六日、平六備仗時定、於大和國宇多郡、與伊豆右衛門尉源有綱義經聲合戰……。」

(一七六) 松井本(片假名本)には次の語がある。

「憲海記、義經息女、桂腹、山口太郎家任、我娘ニシテ大和式部卿禪師ニ娶タリ、女二人出生アリ、四十二及ブ迄男子ナカリシニ、常ニ觀音ヲ信ジ、其御名御經ヲ怠ル事ナシ、アル夜夢ニ尊キ僧ノ白蓮華ヲ一英持チ給フガ、是ヲ汝ニ預クルト宣フニ、其ノ白蓮華ヲ吞ムト覺エテ夢サメヌ、是觀自在ノ御告ト有難ク覺エシニ、程ナク懷妊有ツテ、男子ヲ産メリ、靈夢ニ任セ白蓮丸ト號ヅク、十二歳ニテ出家トナル、是中道和尚ナリ、律苑僧寶傳ニ、中道律師、諱聖子、和州ノ人也、密教ヲ報恩院憲深僧正ニ受タル也、南都眞言院ヲ中興トス、後石清水檢校行清律師ヲ招請、法園寺ヲ建テ、開山始祖トス、正應四年十一月廿七日遷化、歳七十三、法園寺ニ葬ルトアリ、法園寺今男山ノ麓ニアリ、執恩院憲深僧正ハ醍醐ナルベシ。」

(一七七) 吾妻鏡、文治四年十月十七日、「叡岳惡僧中有俊章者、年來與豫州成斷金契約、仍今度牢籠之間、數月令隱容之、又至赴奥州之時、相率伴黨等送長途、歸洛之後、企謀叛之由有其聞、仍内々窺彼左右、可召進其身之旨、被仰在京御家人等云々。」

(一七八) 吾妻鏡、文治五年閏四月卅日、「今日於陸奥國、泰衡襲源與州、是且任勅定且依二品仰也、豫州在民部少輔基成朝臣衣河館、泰衡從兵數百騎、馳至其所合戰、與州家人等雖相防、悉以敗績、與州入持佛堂、先害妻廿二歳、子女子四歳、次自殺云々。」

(一七九) 吾妻鏡、文治三年二月十日、「前伊豫守義顯、日來隱住所々、度々遁追捕使之害訖、遂經伊勢美濃等赴奥州、是依侍陸奥守秀衡入道權勢也、相具妻室男女、皆假姿於山伏并兒童等云々。」

(一八〇) 義經記卷七、三の口の關通り給ふ事參照。

(一八一) 義經記卷七、平泉寺御見物事參照。

(一八二) 謡曲、安宅によるものか。



(一八三) 吾妻鏡、文治三年十月廿九日、「今日、秀衡入道於陸奥國平泉館卒去、月來重病依少侍、其時以

前伊豫守義顯爲大將軍、可令國務之由、令遺言男泰衡以下云々。」

(一八四) 吾妻鏡、文治四年四月九日、「下向奥州之官史生國光、院廳官景弘等、去月廿二日出京、是仰泰

衡、可擲進奥州之由也、彼兩人帶宣旨並廳御下文等、今日已參着鎌倉……。」宣旨状もある。

(一八五) 吾妻鏡、文治五年九月十五日、「樋爪太郎俊衡入道並第五郎季衡、爲降人參厨河、俊衡具子息三

人……二品召出彼等尊其體、俊衡齡已及六旬、頭亦刷繁霜、誠老羸之容貌、尤足御憐愍也……。」

(一八六) 吾妻鏡、文治五年六月廿六日、「奥州有兵革、泰衡誅弟泉三郎忠衡年廿三是同意奥州之間、依有  
宣下旨也云々。」

(一八七) 吾妻鏡、文治五年九月十六日、「無量光院兼新御堂事、秀衡建立之、其堂内四壁扉圖繪觀經大意、  
加之自圖繪狩獵之體、本佛者阿彌陀丈六也、三重寶塔院内莊嚴、悉以所摸宇治平等院也。」

(一八八) 吾妻鏡の補訂は吉川本による。

(一八九) 松井本(平假名本)はこの一節を平假名交り文として本文とする。同片假名本も本文とする。

(一九〇) 東海道名所記卷一、藤澤の條に、白旗大明神とありて同趣旨の事を述べてゐる。

(一九一) 松井本(平假名本)は、以下、神社考までを本文とする。

(一九二) 島津久基、「義經傳説と文學」一七二頁参照。義經知諸記にはなほこの他に記述がある。

(一九三) 松井本(片假名本)の頭注に、「此比奥州ノ士ニ渡邊治太夫ト云者能舊記ノ事ヲ覺、記錄ヲモ能

見タル者、彼殘夢ニ逢テ、舊記ニ見ヘタル義經、又家人等ノ事ヲタヅヌルニ、殘夢詞不分明ニシテ年  
久敷事ナレバワスル、ト云フ、渡邊笑テ、此渡邊コソ常陸房ニテコソアランズラント云リ」とある。

(一九四) 本朝神社考卷六。「義經傳説と文學」一七二頁参照。

(一九五) 松井本(平假名本)は下の一節を本文とする。

# 異本義經記解説

## 一

異本義經記は義經記（八卷）の異本ではない。別の書である。本書に就いての考察は殆どないといつてよい。鹽尻卷五十六（日本隨筆大成卷十、一〇二頁）、山城國粟田口に蹴舉といふ處ありの條に、天野信景が、

昔關原與市源義經にうたれし所といふ、古書に有や、云、異本義經記に安元三年初秋の事といへり。

と記してゐるが、別に異本義經記については述べる所がない。次は繪入頭書義經記評判系圖傳記大意附錄人として、元錄十六年、十四冊本として刊行し、奥に、

于時元祿十六癸未歲 孟春大吉祥日

京 押小路通麩屋町西江入町金屋

安浦市兵衛刊行

とあり、同板を以て享保四年に改版し、

享保四年 大阪安堂寺町心齋橋筋

己亥正月吉旦 書肆大野木市兵衛

と刊記のある義經記大全によると、異本義經記を引用して居る所が少くない。未刊國文古注釋大系の第十四冊によりてその主要なるものを示すと、義經記評判卷二上では、最後の伊勢三郎義經の臣下に初て成事の章の終に、

伊勢三郎在所伊勢四日市五六町程四の方川島といふ所に屋敷の跡あり親義連にてはなし俊盛といへり俊盛が俊盛が石塔ふるびたる有松有所のものは義盛が墓といふ本文相違（八八頁上）とある。本書の一節を参考したものである。卷二下、鬼一法眼の事の章の終に、

傳にいはくこがねづくりの太刀はびぜんともなりが作二尺一寸法げんころもの下にくずのはかまを着し銀卷したる刀をさし仕女二人にかいしやくせられ……張天覺が素書の序にいはく夫素書六篇は……法眼門弟白川湛海といふ者一とせ出雲路の因地の時……鬼一がむすめの事實は大納言藤成通卿の妾のはらの息女と云り……按るにくらま掛取谷の一塚はかつらひめの墓所か（一〇〇頁下）

卷四上、よりともよしつねに對面の事の章の終に、

傳曰義經おさなき時より心たけくしてそのほこさきに向ふものなし先祖よりよしよしといふとうのいくさをたづねもとめ鬼一法げんがぐんぼうの奥儀をきはめ……河越のしげふさに宣ひしとにや（一二六頁下）

とあり、同卷、よしつね平家の討手に上り給ふ事の章の終にも、

傳曰元暦二年二月十六日義經八島へかどでの時大くらの卿やすつね朝臣がていにいたり……

四國へ打立給ふと<sup>式</sup>。(一二九頁下)

同卷、腰越の申狀の事の章の終にも、

傳曰六月五日より朝公つみによし經に御たいめんなくして……一通の狀をしたゝめいせの三郎を使として大江のひろもと朝臣の方へつかはされける是を世にこしごえ狀といへり

(一二三頁上)

卷四下、土佐房よしつねの討手に上る事の章の初めに、

傳曰元暦二年九月鎌倉より梶原源太かけすゑ義勝房成尋御使として上らく……あるひはいはく土佐ぼう私に望みて上りたるとも云へり(一二三頁上)

とあり、又同章に、

傳曰義經此事をきゝ給ひ辨慶を使として土佐房をめす……しやていのみのみをはじめむねとのらうどう残りすくなに討たれたり(一二三五頁上)

とあり、同章の頭注に、

備前の平四郎成春は久我内大臣雅通公の諸大夫備前守平の兼房が男なり安元三年の夏ある夜

……成春を家人につかひ給ふといへり(一二二頁下)

とあり、同章に、

傳曰粟田口の邊によしつねの人數さしふさぎたるときゝて龍花越へかゝりし時……神はつかと世の人にくみけると也(一二四五頁上)

とあり、同章に、

傳曰土佐房はくらまの僧正が谷にいたりて行方をうしなひいわあなの内に……六條かはらにて切られけるこそふびんなれ（一四六頁上）

とある。次によしつね都落の事の章の、頭注に、

ひたち坊 世に云傳ふそのかみ奥州に残夢といふ者有出所行年知れず……長命といへり是詐也用べからず（一五〇頁下）

とある。これは異本義經記下巻の終に見える語である。同章に、

傳曰元暦二年十月三日よしつね仙洞へまいりて申上げるは……諸卿一同に此儀尤のよしにてすなはちいんぜんを給はりたるといへり（一五二頁下）

とある。卷五上、巻頭に、

傳曰文治元年十月廿九日よしつねをせめんがためによりとも公御馬を出さるべきに、……大和路におもむき給ひし時は相したがふものどもいづれもあつまりしとなり（一五七頁上）

同卷、しづか吉野山に捨らるる事の章に、

傳曰文治元年十一月十七日しづか藤尾坂の邊にさまよひありきて……三月一日しづかかまくらへ下ると言々事は六の下にみへたり（一六三頁下）

とあり、同卷、よしつね吉野山を落給ふ事の章に、

傳曰文治元年十一月下旬よしつね山伏のすがたとなりて大和のくにたうのみね十字坊に入給

ふ……吉水院にもよしつねのぐそくとてありせうへいがわにて前をつゝむ同じく太刀もあり

(一六六頁上)

同卷、たゞのふよし野にとゞまる事の章の頭注に、

忠信は秀衡の近親也……坊門三郎經忠といへり。

とあり、卷六上、關東よりくわんじゅばうを召さるる事の章の終に、

傳曰文治三年三月南都くわんじゅばうとくご聖佛めしによつて……と思ひてりやうじやう申されしといへり(二〇五頁上)

とあり、卷六下、しづかかまくらへ下る事の章の頭注に、

いその前司は阿波國磯といふ所のものゆへに磯の前司といへり……今は所の者あやまりて志津木といへり(二〇七頁上)

とあり、同章の終に、

評曰文治元年十一月十七日よしつねよし野山へ入給ふ時ざつしき下部をつけて……

(二一〇頁下)

とあり、一部異本義經記による所がある。

次に同卷、しづかわか宮八幡宮へさんけいの事の章の終に、

傳にいはく文治二年三月一日豫州安靜及母磯前司自京鎌倉來ると言々同五月十四日くどうさへもんかぢはら三郎……かげしげおもてをあかめしと言々。○よしつねをうしうにててじがい

のよしを聞て……おうしうのかたへ下りしともいへり○傳に曰少納言みちのり……元暦元年六月はじめて義經に奉公すといへり（二一九頁上）

とある。卷七上の卷頭に、

傳曰文治二年五月の末よしつねくらま東光坊にしのびてましますよし……ぜんりんぼうかくにちをばなだめてかへされしとなり（二一九頁下）

とあり、卷八の卷頭に、

傳曰義經平いづみへ下り着き給へばひでひらかたうどして……よりとも公やすからず思ひ給ひて七道のぐんぜいおよそ二十六萬よき……利有べからずとてかまくらへ引かへしたまへりと云々（二五一頁下、二五二頁上）

とあり、秀平死去の事の章の終に、

傳曰文治三年十月廿九日ひでひら死去有……其外かた岡むさしなども人しらずかの島へわたりけると也（二五六頁上）

同卷、すゝ木の三郎しげ家高だちへ參る事の章の頭注に、

文治五年三月北條五郎時つら伊豆の國府において鈴木三郎をいけどる……かまくらを忍びいで、おろしうころも川のたちへ參しと也（二五九頁上下）

とあり、同卷、ころも川合戦の事の章の終に、

傳曰文治五年閏四月晦日たつの刻もとよしのくわんじや高ひらを大将として……よしつねの

らうどう皆もつて死生しらずと云（二六三頁下）

とあり、同卷、秀平が子ども御ついたうの事の章の頭注に、

文治五年六月十三日泰衡使者……其首を直に藤澤に葬るといへり

とあり、終に、

傳にいはくやす平平いづみを落てゑぞが鳴へおもむきたりといへり……さがみの國白はと大明神の事そのかみ里人あまねく夢みらく……岡ざきじやうるりくるはにおさむとにや○そのかみ藝州毛利家の侍に佐世石見守といひしもの……其時もかくのごとくなる事ありしといへり（二六七頁下、二六八頁上）

とある。以上はいづれも異本義經記よりの引用である。然し異本義經記といふ語を示さないのは、著者松風廬戈止軒の秘したためであらうか。

次に謡曲拾葉抄卷十一、二人靜の章に、

異本義經記云、義經奥州にて自害の由を聞て、靜尼に成て名をば再性と付て暫嵯峨の邊に在しが後南都に住し廿四の歳終命しといへり、又奥州の方へ下りし共いへり、傳二云、少納言通憲入道信西時勢舞の上手にて……（中略）今は所の者あやまりて志津木といへりと云、和田宗允丹後海陸巡遊日録云、丹後に磯と云所有、磯前司及ビ靜此所より出る也、靜が塔在于此云。

とあり、兼房の條に、



異本云、増尾十郎權頭兼房ハ近衛院の役人にて有しぞ、常盤の門葉にて義經の乳母の親也、丹波國馬路の郷領地せり……（中略）馬路の郷を沒收せられて、山階音羽の郷に閑居したり  
す。

同卷十二、安宅の章には、富樫何某の條に、

異本義經記云、加賀國富樫介家直が關所ト下略。

とあり、判官殿十二人の作り山伏の條に、

又異本に主人十二、又山門の僧、北の方と共に都合十六人と有。

とあり、伊勢三郎の條に、

異本義經記云、義盛ハ伊勢國河嶋次郎俊盛が子三郎武盛と號す、後義經の家人と成て義盛と改むと文略。

駿河次郎の條に、

異本義經記云、駿河次郎清重事、義經駿河國浮嶋が原を通り給ひし時、獵人有て行連終道物語する如何成者ぞと名を尋給ふ時に、駿河國竹下二郎清重と答ふ、其時見參して義經に奉仕す。

常陸房の條に、

異本義經記云、常陸房海尊事、園城寺の出家、刑部卿禪師といへり、強力者ゆへ荒刑部と云ける、義經法眼が許に在時も志を通じ崇敬けると也、平家追討の時、義經に屬し、常陸房海

尊と名乗ルと<sup>式</sup>。

とあり、卷十三、船辨慶の章に、

異本義經記云、武藏坊辨慶ハ紀州ノ住人岩田入道寂昌が子也、仁平元年四月八日に誕生す、比叡山西塔櫻本坊の辨長僧都の弟子となる、只常に力業、太刀打を好む、依て異名を鬼若丸と呼ける、其比西塔の北谷定泉坊附の武藏坊といへる明房に入自剃髪して武藏坊辨慶と名のる、全文略。

とあり、同卷十九、鞍馬天狗の章に、

異本義經記云、常盤清盛に馴て息女を産で後、一條大藏卿長成朝臣の妻室に成て、ここにても子共出来たる、牛若は暫く繼父長成朝臣の方にて育立……（中略）禪林房色に愛着せし故也とぞ<sup>式</sup>。

とあり、又、

異本義經記云、一條堀川に陰陽師鬼一法眼と云者あり、希代の軍書を持、是醍醐帝延長元年五月從三位中納言大江維時遣唐使に……（中略）娘に偷出させ寫し取り悉く其指要を納得す<sup>式</sup>。

とあり、又、

異本義經記云、義經烏帽子に小結して、絹文紗の直垂、白き大口金作の太刀、虎の革の尻鞆入て、兒立なれば眉取て黒齒黒にして時に年十八歳麗質婦人の如し<sup>式</sup>。

又、

異本義經記云、遮那王早足飛越なんどし給ふに、外の人よりも身も軽く有しぞ、十四歳の秋の頃より惡僧など集木太刀にて打合給ふに、手利にて……（中略）遮那王殿に此事を尋ねしに聊も宣ふ事もなく只貴船へ夜毎に詣ずと計答られしと也云。

卷二十、熊坂の章に、

異本義經記云、熊坂張樊と云盜人、加賀國熊坂の者とぞ、美濃國赤坂の宿にて夜討して牛若丸に討れしと云へり、傳曰、張樊が事……（中略）小猿など云者、其比の盜人といへり云。とあり、吉次の條に、

異本に、三條橘次季春と有……

異本義經記云、三條橘次季春と云金商人あり、後堀彌太郎景光は此季春といへり、毎年奥州へ下る、秀衡が方へも出入と也、遮那王橘次が參詣毎に昵給ふと云。

とある。何れも異本義經記よりの引用である。次は島津久基博士の「義經傳説と文學」（昭和十年一月二十一日刊、明治書院）中の研究であるが、博士は異本義經記を見て居られないので、第二章の關原與市傳説の條にも、鹽尻卷五十六の引用を示しながら、同書が存在せぬので實すに由が無い（二九九頁）と述べ、安宅傳説の條にも、謠曲安宅は異本義經記から出たと説がある。これも又拾葉抄及び小中村清矩博士の説である。この異本義經記なるものには不幸にして未だ接したことがないと述べ（四五二頁）、續いて、拾葉抄及び柳亭種彦の熊坂物語の引用によりて

存在は知られるが、實體は疑問があるとして、

この異本義經記も江戸時代の作で、謠曲安宅との關係はこれも亦却つて逆であると推定せざるを得ないのである。

と述べ、拾葉抄引用の同書の内容が、明らかに義經知緒記、或は義經勲功記（正徳二年刊）と一致する部分が多く、その點でも却つてさまで古いものでなく、流布本よりは無論新しく、或は勲功記か知緒記あたりから取つて作られたものではあるまいかと述べられた。しかし異本義經記は江戸時代初期以後の成立と認められるが、勲功記から取つたものではなく、既に義經記評判に引用せられ、知緒記との關係は筆者は未見でこれを質することが出来ないが、島津博士の引用に、

異本義經記云、加賀國富樫介家直が關所を通り給ふ。家直が弟齋藤次助家、その場に在りて見咎めたりしを……（四五二頁）

とあるが、異本義經記には、家直が弟云々はない語である。又異本義經記引用の書として、謠曲拾葉抄の外に、義經一代記拔萃熊坂物語、山城名勝志、陽春廬雜考等をあげて居られる。そして義經記勲功記と比較して、鬼一法眼傳説、熊坂長範傳説、橋辨慶傳説等に同一内容があるとして、義經知緒記と異本義經記とも同一のものが多いとして、

義經知緒記—義經記評判—勲功記—鎌倉實記

といふ系圖を示された。これは重要な示唆であつて今後の研究に參考となるであらう。

異本義經記の傳本は現在三部存在する。その一は本書の底本である叡山文庫藏本である。上下二冊、美濃判袋綴、一面十行乃至十二行、片假名交り書寫、恐らく江戸中期の寫であらう。その二は、松井簡治博士舊藏本で、靜嘉堂文庫現藏、美濃判袋綴、上下二冊、片假名交り書寫、一面十行、注を二行に入れて一行十八字詰、江戸末期の寫であらう。卷末に、村上安興之の識語と藏印がある。本書は叡山文庫藏本に比して誤脱が少いが、後の増補と認むべき記事が二箇所、頭注に憲海記としての引用があり、その他注が若干ある。その三も、同じく松井簡治博士舊藏本で、上下二卷一冊、美濃判袋綴、本文を平假名交り十行書寫、注は多く片假名交りとして書寫、同じく江戸末期の書寫と認められる。本書は叡山文庫藏本に比して僅少の差がある。例へば、

叡山文庫藏本

義朝ノ子ノ内ヘハ不入姓モ改藤原

季範娘腹ノ息女

命ニ依テ政家指殺シタルゾ

自杭瀬川ヘ入水有シゾ

とあるが如きである。内容上、差異はないので詳しくはあげない。卷頭に一枚錯亂がある。

松井本

義朝の公達の内ゑはいれず姓も藤原に改らる

季範が娘の腹に出生の息女を

仰によつて政家さし殺したり

松杭川へ身を投死す

## 三

この異本義經記は如何なるものであるかといへば、義經傳説を編輯したもので、一貫した作品とは言ひ難い所がある。義經記の如き文藝的な性格は少く、各注にも示した如く、吾妻鏡と一致する所が少くない。この點は吾妻鏡によりて構成されたと認められよう。又他に見えぬ傳説も少くない。例へば鎌田兵衛の女、牛王女の物語などがその好き例である。伊勢三郎義盛の親、河嶋二郎俊盛の事も他に見えないものである。又義經の部下となつた増尾十郎兼房、海尊、鈴木二郎重善、熊井太郎、鷲尾庄司義久父子の事なども他に見えない。この様な傳説が何を根據として成立したか知る由もないが、本書の存在によりて義經傳説が更に豊富になつて居る點は看過出来ないものがある。更に義經記の異本として、吉岡本、長谷川本の存在を示すことも注目すべきである。これらの義經記の存在は不明であるが、その斷片を傳へるのは本書以外に他に資料が存しない。義經の蝦夷が島へ渡つたといふ傳説も注目すべきものである。義經の奥州下向について、義經記の如き創作的なものがなく、安宅傳説もないことは、本書の編者が史實に忠實ならんとしてとりあげなかつたものであらうか。本朝神社考や丹後海陸巡遊日録等を注として引用してゐる點より、本書の成立を江戸初期のものと認むべきであらうか。今後の研究をまつものである。